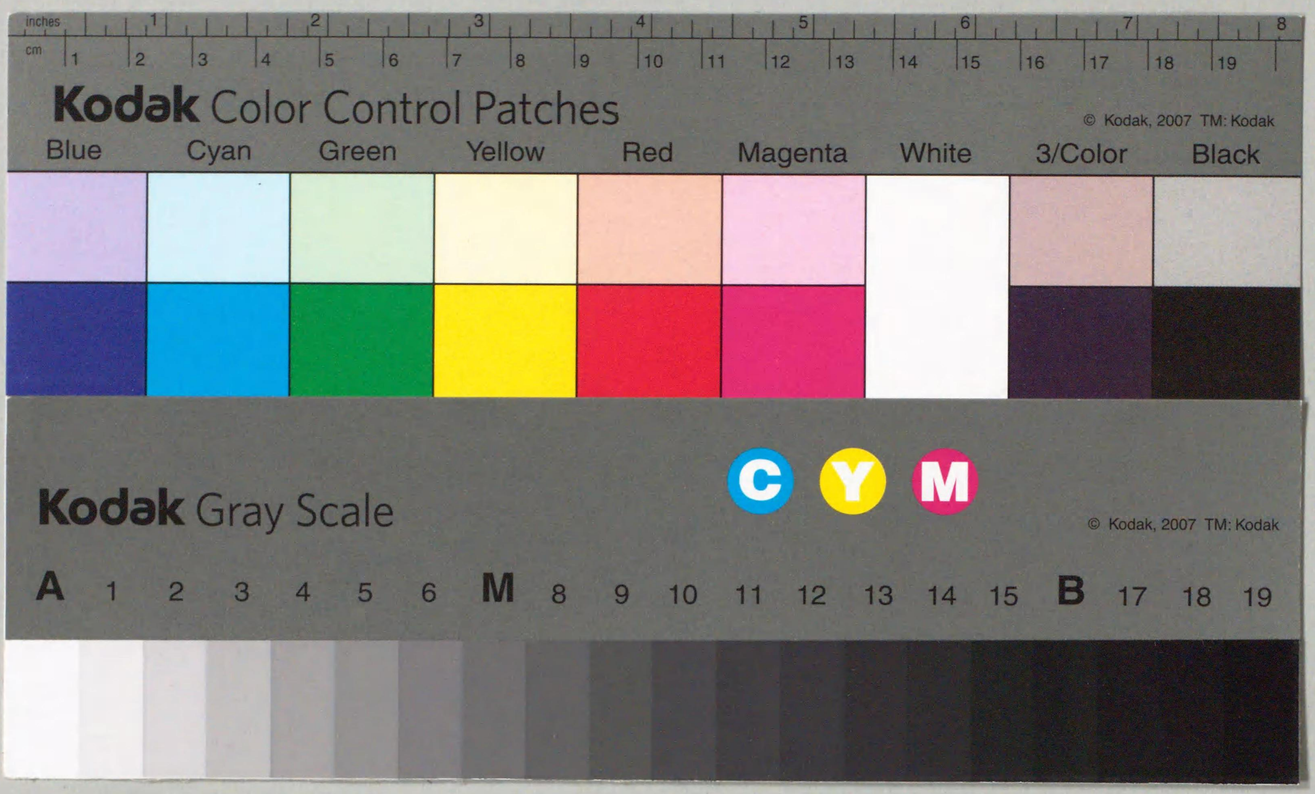


添附物
附図
1枚

X 複写

DL113-9
1200900973453

極秘

朝鮮石炭礦業事情研究

昭和十六年十一月

日本石炭株式會社
企畫部（企畫課）

極秘

DL 113
9

國會圖書館藏書
53.8.15

目次

序 …… 一頁
第一章 緒言 …… 一頁
第一節 朝鮮經濟一般ニ對スル概觀 …… 二頁
第二節 朝鮮炭礦業ノ史的發展 …… 一一頁
第二章 朝鮮炭ノ生產過程 …… 二二頁
第一節 自然條件 …… 二二頁
(1) 資源賦存狀態 …… 二二頁
(2) 炭層ノ狀態 …… 四二頁
(3) 炭質 …… 五三頁
第二節 最近ノ出炭狀況ト會社經營狀態 …… 五三頁
第三節 技術水準ノ諸問題 …… 五三頁
第四節 勞働力ノ特異性 …… 五九頁
(1) 勞働力ノ給源 …… 五九頁
(2) 勞働條件 …… 五九頁
1. 賃銀、2. 勞働時間、3. 災害
(3) 勞働力ノ生產性 …… 五九頁
1. 構成 2. 採炭能率 3. 移動 4. 稼働

78W34311

第三章　朝鮮炭ノ流通ト消費
前書……九一頁
第一節　内地ニ於ケル朝鮮炭ノ流通……九二頁
第二節　鮮内ニ於ケル配給統制……一〇〇頁
(1)地内需要
(2)朝鮮ニ於ケル石炭ノ配給統制
（註）第四章トシテ輸送ニ關スル研究ガ追ツテ附加スル事トナツテヰル

序

朝鮮經濟ノ現段階ハ難航スル日本戰時經濟ノ一環トシテ所謂「内鮮一体」ノスローガンノ下ニ我國長期經濟戰ノ尖兵トシテ新タニ脚光ヲ浴ビテ立上リツツアル。ソレハ大陸ノ兵站基地トシテ或ハ又米穀問題解決ノ鍵鑰トシテ日本戰時經濟ノ潮流ニ自カラヲ投ジ生產力擴充計畫ノ重要ナ支柱タラシメラレタノデアル。斯ク朝鮮經濟ニ對スル要請ガ多岐ニ亘ルト同時ニ益々大ナラントシツツアル秋ニアタリ朝鮮產業構成ノ主要ナ一翼ヲナス石炭礦業ニ對シ正シキ認識ヲ深メル事ハ我々ニ取リテモ亦必要ノ事ト信ズル。

尙本調査ハ内地移入炭ヲ產出スル主要炭礦ヲ選定シ、之ニ當部ニ於テ作成セル調査表ニ該當事項ノ記入方ヲ依頼シ得タル回答ヲ整理シテ之ヲ中心トシテ關係資料ヲ取纏メタモノデアル。

本資料ノ意圖スル處ハ從來處々ニ散在スル朝鮮炭關係資料ヲ一括シ一應ノ理論的体系ニ從ツテ整理ヲ加ヘ、之ニ當社最近ノ調査ヲ織込ンダモノデアツテ必要以上ト思ハレルカモ知レナイ程度迄ナルベク多數ノ統計

圖表ヲ掲ゲテ利用者ニ便ナル事ヲ期シタ。

尚多數ノ極秘資料ヲ掲載シアル關係上特別ノ注意ヲ以テ秘扱ヲ乞フ次第デアル。

第一章　緒言

第一節　朝鮮經濟一般ニ對スル概觀

前書

云フ迄モ無ク今日ノ如キ資本制商品生産ニアツテハ總テノ產業ハ價値ノ實現ヲ周ツテ有機的ニ構築セラレテキル。石炭礦業ニ於テモ切リ離サレタ環タルコトハ出來ナイ。常ニ何等カノ意味ニ於テ朝鮮地內ナリ、日本內地ナリノ再生產ト結合シテキルコトハ銘記セネバナラヌ。從ツテ朝鮮ノ石炭業ヲ論ズルニハ一應ノ省察ヲソノ全構造ニ向ケルコトハ當然ノ要請ト云ヒ得ヤウ。半島ニ於ケル炭礦業ガ全產業構成中如何ナル地位ヲ占メテキルカヲ決スル上ニ、又朝鮮自體ガ今後ノ發展史ニ演ズベキ役割ヲトスル上ニ於テ、或ハ勞力ノ問題ヲ論ジ、地內需要ヲ論ズル場合ニ、

此ノ全機構的把握ナクシテハ無意味ナル循環論ニ情サザルヲ得マイ。此ノ故ニ以下簡單ニ朝鮮經濟ノ全般的特徴附ケヲ行ヒ、後述スル具體的諸資料ノ整理ニ當リ取ラル可キ方向ヲ明瞭ナラシメント思惟スルモノデアル。

明治三十一年（一八九八年）舊韓國政府ハ量地衙門ヲ設置シタノヲ起點トシテ、土地調査事業ヲ展開シツツ、此レヲ樞軸トシテ典型的ナ土地公有制度ヲ根幹トスル「亞細亞」的封建制度ヲバ歷史ノ不可避的傾斜ヲ以テ除々ニ解體ノ方向ヲ辿ラシメントスルカノ如クニ見エタノデアル。然ルニ當時ニ於ケル生產力ノ段階ハ典型的停滯性ノ下ニ農工間ノ未分化商業資本蓄積ノ低位性ニヨリ從來ノ手工業ヲ新タナル工場制手工業ヘ轉化スベキ基礎ヲ全ク用意セシメナカツタノデアル。斯クテ全國的ノ農民戰爭タル東學黨ノ亂ニヨリ一應ノ終焉ヲ告ゲタ朝鮮封建制度ハ自己ノ代替者トシテ近代的產業資本ヲ產ミ出ス可キ基礎條件ヲ用意シ得ナカツタノデアル。然ルニ他方ニ於テハ當時明治維新ヲ經過シテ新興ノ意氣ニ燃エル我國衣料產業ハ國內市場ノ狹隘ナル故ニ其ノ販賣市場

ヲ國外ニ求メ、更ニ軍義的要請ノ下ニ促迫的ニ創出セラレタ鍵鑰產業ハ其ノ基本原料＝鐵、石炭ノ確保ヲ必要トシタノデ、大陸特ニ其ノ橋梁トシテノ朝鮮半島ニ關心ヲ集メ、日清、日露ノ兩役ヲ經テ愈々其ノ地歩ヲ確保シタノデアッタ。斯クシテ此ノ朝鮮自體ノ內在的發展力ノ低位性ト澁刺トシテ登場シタ日本資本ノ大陸政策ヘノ要望トハ互ニ絡ミ合ヒツツ日韓併合ヲ織リ上ゲテ行ッタノデアッタ。

以上ノ如クニシテ帝國ノ範圖ニ加ヘラレタ朝鮮ハ其ノ後如何ナル展開ヲ齎シタカ、ソシテ又如何ナル特質ヲ現段階ノ朝鮮ガ內包シテヰルカ、以下少シク檢討ヲ加ヘルデアラウ。

前述土地調査事業ノ展開過程ニ應ジテ、一方ニハ封建的收租權ノ法的確認ト、他方ニ於テ直接生產者ノ世襲的諸權ノ喪失ト、土地ヨリノ所謂「自由」トガ進行シタノデアッタガ、其ノ決定的農村ノ分解ニ依ッテ、農民ヲ賃銀勞働者化スベク朝鮮ハ餘リニモ加工工業ニ於テ其ノ基礎條件ヲ有シテヰナカッタノデアル。斯クテ一切ノ生產手段カラノ決定的解放ト共ニ自己ノ勞働力ヲ商品化スル道ハ彼等ニ開カレズ、止ムナク細分化

セラレタ一片ノ土地ニ膠着シ、原始的ナ農具ヲ唯一ノ生産手段トシテ自己ガ獨立ノ經營主體トナリ、零細農經營ニ從事シツツ五〇%以上ノ高額地代ノ地主下ニ封建的小農經濟ヲ存續セザルヲ得ナカツタノデアル。

斯カル小農經濟ニアツテハ平均利潤ハオロカ、自己ノ肉體的再生産スラ困難ナ實狀ニアリ、農業面ヘノ資本投下ハ殆ド行ハレズ、舊態依然タル停滯性ヲ持續シ、加フルニ日本内地ヲ主導トスル先進資本主義諸國ノ商品流入ニ依ル壓迫ハ朝鮮農村ニ於ケル家内工業的自給手工業ヲ破綻セシメタ。斯クテ朝鮮經濟ハ其ノ外地的非資本主義的性格ヲ體現化シツツ、更ニ日本内地經濟ノ特異性ヲ反映シテ、毎年增大スル農村過剩人口ヲ擁シナガラモソレヲ賃銀勞働者タラシメ得ズ、農村ニ於ケル封建的殘滓ハ決定的ニ此ノ轉化ヲ困難ナラシメテヰルノデアル。換言スレバ、耕作單位ガ逐年細分化サレテ行ク小農民層ハ賃銀勞働ヨリ賃銀收入ナクシテハ自己ノ農業經營ノ再生産ヲ續行スルコトスラ困難ナノデ、否應ナク賃銀收入ノ機會ヲ求メテ都市ニ或ハ地方ノ土木工事ヘト出稼スルノデアルガ、其ノ賃銀收入ノ機會モ朝鮮自體ノ工業的發展ノ低水準ノ故ニ半島内ニ於

テハ非常ニ制限セラレ、斯クシテ遠ク内地、滿洲等ヘト流旅ノ身トナッテ、故郷ヘノ送金ヲ行フ事ニヨッテノミ零細ナル一片ノ土地ヲ高利貸的地主ノ土地集中カラ免カレシメル事ガ出來ルノデアル。

以上ノ如キ農業體制ノ上ニ構築セラレタ朝鮮ノ近代的工業ノ發展ハ如何ナル傾向ヲ辿ッタデアラウカ。前述セル如ク朝鮮封建社會ノ終末ハ自己ノ内在的生産力ノ發展ニ依ルモノデハナカッタト云フ事實、更ニ商業資本ノ原始蓄積ノ缺除ハ朝鮮内部ヨリスル資本主義的發展ヲ不可能ナラシメ、從ッテ日本資本其ノ他ノ先進資本主義國ノ資本投下ナクシテハ近代工業ノ展開ハ見ラレナカッタ。

然ルニ朝鮮ヘノ資本投下ヲ誘フ外地的特別利潤ヲ保證スベキ條件ハ内地當該産業トノ對抗關係ヲモ考慮スル時必ズシモ充分デハナク、僅カニ外地的低賃銀ト社會立法不整備ヲ以テ武器トスル紡織工業ガ僅カナ發展ヲ見タノミデアッタガ、其ノ後水力發電技術ノ飛躍的發展ニヨリ眠レル北鮮ノ水力資源ヲ呼ビ醒シ、厖大ナ電力ヲ中心ニ近代的化學工業ガ驚異的速度ヲ以テ躍進シタノデアッタ。此ノ化學工業ノ發展ト共ニ昭和九ー

朝鮮工產額累年表

（單位千圓）

年次	產業別	總數	紡織工業	金屬工業	機械器具工業	窯業	化學工業	木製品工業	印刷及製本業	食料品工業	瓦斯及電氣業	其他ノ工業
昭和五年	實數	280,964	45,693	6,041	10,087	10,460	42,056	5,546	8,666	82,173	6,432	63,810
	指數	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100
	%	100	16	2	4	4	15	2	3	29	2	23
昭和七年	實數	310,837	47,198	6,232	8,313	9,839	49,555	5,021	9,676	104,259	11,069	59,675
	指數	111	103	103	82	94	118	91	112	127	172	94
	%	100	15	2	3	3	16	2	3	33	4	19
昭和九年	實數	438,401	67,791	9,661	9,481	12,472	91,151	7,271	11,238	137,670	12,831	78,835
	指數	156	148	160	94	119	217	131	130	168	199	124
	%	100	15	2	2	3	21	2	3	31	3	18
昭和十一年	實數	730,806	99,477	33,735	13,503	21,876	195,431	9,936	18,133	199,883	39,989	103,843
	指數	260	218	558	134	209	465	179	152	243	622	163
	%	100	14	5	2	3	26	1	2	27	5	15
昭和十二年	實數	1,140,118	164,821	91,966	26,799	35,877	352,819	15,054	16,948	277,208	24,502	134,124
	指數	406	361	1,522	266	343	839	271	196	337	381	210
	%	100	15	8	2	3	31	1	2	24	2	12

十年即チ滿洲事變ヲ契機トシテ重工業、就中金屬工業ノ發展ガ齊サレタノデアツタ。工業發展ノ指標トシテ第一表ヲ揭ゲタガ、本表ガ如實ニ示ス如ク金屬化學工業ノ飛躍的發展ハ正ニ注目ニ値スルモノガアル。卽チ昭和五年（金融恐慌ノ次年度）ヲ百トスレバ次ノ如クデアル。

	工產額總指數	金屬工業指數	化學工業指數
昭和五年	一〇〇	一〇〇	一〇〇
〃 七年	一一一	一〇三	一一八
〃 九年	一五六	一六〇	二一七
〃 十一年	二六〇	五五八	四六五
〃 十三年	四〇六	一、五二二	八三九

斯カル生產手段生產部門ノ一部ニ於ケル生產力ノ飛躍的發展ヲ目シテ朝鮮ノ產業革命ヲ云々シ、或ハ朝鮮ノ外地的性格ノ否定＝內地ヨリノ脫落ヲ意味スル如ク解スル者モアルガ、ソレハ專ロ全ク反對ノ事實ヲ證明スルニ役立ツニ過ギヌデアラウ。云フ迄モナク產業革命ノ達成如何ハ單ニ技術的假象ヲ以テ決スルノデハナク、全產業ガ再生產軌道ニ定置セラ

レ第一部門ト第二部門トニ一應ノ自給ノ確立ニヨリ決定セラルベキモノチノデアル。然ルニ金屬、化學工業ノ鮮内ニ於ケル生産ハ、金屬工業ニ於テハ其ノ製品ヲ消費スベキ機械器具工業ノ相對的生産低位ガアリ、又一方化學工業ニ於テハ日本内地軍事機構ト鑛鑰産業トノ結合ノ上ニ立ツテノミ自己ノ厖大ナ機構ヲ維持シ得ルノデアツテ、前述セル如ク朝鮮農業體制ハ化學工業製品タル金肥ヲ斯クモ多量ニ消費スル事ノ不可能ナルコトハ云フ迄モナイ。更ニ機械器具工業ガ總工産額中ニ占ムル比率ノ低下ハ次ノ如クデアル。

	實數	指數	總額ニ占ムル%
	千圓		
昭和五年	一〇〇八七	一〇〇	四%
〃七年	八三一三	八二	三〃
〃九年	九四八一	九四	三〃
〃十一年	一三五〇三	一三四	三〃
〃十三年	二六七九九	二六六	二〃

説明スル迄モナク機械器具產業ノ低位ナル事ハ、北鮮ニ於ケル近代的金屬化學工業ノ需要ニ對應シ得ヌ事ハ勿論、紡織工業ノ必要ヲ滿シ得ヌ事ハ其ノ生產額ノ絕對數ガ明瞭ニ物語ル所デアル。

以上ノ如キ朝鮮經濟ノ展開ハ內鮮一體ノ要請ヲ益々熾烈ナラシムル所ノ物的基礎ヲ形成スルモノト云ハネバナラナイ。斯カル基礎ノ上ニ朝鮮經濟ハ日本戰時經濟ニ對應シテ新タナル相貌ヲ呈スルニ至ツタノデアル。朝鮮經濟ノ現段階ノ特質ニ分析ヲ加フレバ次ノ如クデアル。

第一ニ云ヒ得ラルル點ハ朝鮮ガ公式的ナ外地タル性格ヲ揚棄シタルガ如キニモ拘ラズ、其ノ本質ニ於テ何等修正サレテヰナイ點デアル。卽チ米穀增產、原料確保ヲ通ジテ所謂內鮮一體ハ益々強化セラレ內地資本蓄積ノ植樺トシテ朝鮮農村ガ動員セラレルト云フコト之デアル。

第二ニ朝鮮農村ガ自然的災害ニ水害、旱害等ヲ偶然的契機トシテ、零細自作農ノ解體ノ危機ニ直面シテヰルコト、更ニ北鮮ニ於ケル勞働需要激增ト內地ヘノ勞力移出等々ハ此ノ傾向ヲ强メズニハ置カナイ。

然ルニ斯カル歷史的必然ノ傾向ニモ拘ラズ此レヲ阻止セントスル全機

構的要請ハ凡ユル政策ニ具體化セラレツツアルト云フ複雑ナ事情ヲ理解スル事ナクシテハ朝鮮經濟ノ今後ノ見透ハ不可能デアラウ。

以上第一、「第二ノ基本線ハ正ニ朝鮮經濟ノ今後ヲ理解スル上ニ最初ニシテ最後ノ命題ヲ提起シテヰル。時局ノ益々緊迫性ヲ加ヘツツアル今日東亞共榮圈＝東亞ブロック經濟内ニ於ケル日本内地ノ有スル使命ヲ理解スル爲ニハ「大陸ノ兵站基地」朝鮮ヲ考ヘル事ナクシテ其ノ其ノ構成ヲ把握スル事ハ不可能デアラウ。

以上少シク朝鮮經濟ニ對スル一般的反省ヲ試ミタノデアルガ、斯カル特異性ガ具體的ニ如何ニ朝鮮炭礦業ヲ制約シ、特色付ケテヰルカ、此點ニ對スル分析ヲ後章ニ於テ展開スルデアラウ。

第二節　朝鮮炭礦業ノ史的發展

朝鮮ニ於ケル石炭礦業ノ發展ヲ問題トスルニ當リ、徒ニ其ノ創生期ノ神秘主義的帷幄ノ內ヲ探リ、史實ノ涉獵ヲスル事ハ本論ニ於テハ無意味ナ努力デアラウ。何故ナラバ、石炭ノ發見ガ何時ノ時代ニ於テナサレタカト云フ事ハ問題デナイ。地中ニ眠ル炭層ヲ呼ビ醒シタモノハ正ニ英國ニ於テ綿紡績「マニユフアクチユア」ノ要請＝蒸汽機關ノ發見ニヨッテナサレタノデアッタ。朝鮮ノ場合ニ於テハマニユフアクチユアの的展開ガナサレ得ナカッタ以上、炭層覺醒ノ魔杖ヲ振フ役割ハ帝國主義的觸手ヲ早クカラ此ノ半島ニ延バシテキタ米人或ハ佛國商社ノ手ニヨリテサレタノデアッタ。資料ハ次ノ如ク語ッテキル。「ー平壤炭田ハ日清戰爭前後鮮人及佛人ノ支配下ニ在リテ採掘セラレシ事アリ。明治三十六年頃ヨリ無煙炭漸ク世ニ知ラレ、平壤無煙炭田ノ龍頭地方ハ佛人ニヨリ、同江東地方ハ米人ニヨリ採掘セラレ、其ノ採掘シタル石炭ハ多ク支那人ニヨリ山東方面ニ輸出セラレ、陶器製造ノ燃料ニ用ヒタリ云々」（日本鑛業發達史中卷四五二三頁）。卽チ其ノ採掘ノイニシアチーブハ勿論、產

出炭ノ配給消費ニ至ル迄地元タル朝鮮トハ全ク無關係ニナサレタノデアツタ。斯カル外國人ニ依ル採掘ニ刺戟セラレ、絶對主義的李王朝ノ指導下ニ朝鮮無煙炭礦ノ先驅タル平壤炭礦ガ「明治三十八年韓國宮内府ニ於テ豐阜會社ヲ設立シ米國技師ヲ聘シテ寺洞附近ノ採掘ニ着手」（明治工業史鑛業編七七三頁）シタ一方、「又殆ド同時ニ佛商ロンドン商會ハ江東郡内土橋附近ニ採掘ノ許可ヲ得テ機械ヲ据付ケテ採炭ノ設備ヲ開始」シ、技術的ニハ一應近代的採炭技術ガ輸入セラレタノデアツタ。

其後四十年八月ニ我國ニ於テ維新政府ガ行ツタ如ク、炭田總テヲ官有トシ、商工部ニ於テ管轄シ、平壤鑛業所官制ヲ發布スルト共ニ、同年十月採掘ニ着手シ、四十二年寺洞第一坑ノ開坑、中高坊山ニ機械設備ヲ行ヒ、採炭業ヲ官行トシタノデアツタ。四十三年八月日韓併合後十月ニハ朝鮮總督府ノ直屬トナリ、寺洞ノ機械設備、鎭南浦ノ棧橋及專用鐵道ヲ建設シ、出炭量モ飛躍的增大ヲ齎ラシタノデアツタ。卽チ

明治四十年　二一五〇屯
、四十一年　四六四八八

明治四十四年　約一〇〇〇〇屯
四十五年　約一三〇〇〇

斯カル出炭ノ促進的發展ハ其ノ大部分ガ内地德山海軍煉炭工場ニ輸出セラレタ。此ノコトハ内地ニ於ケル採炭機構ニ於ケル日本内地產業構成上ノ矛盾ヲ、ソシテ又ソレ故ニコソ必然ナラシメラレタ大陸政策ノ本來的性格、卽チ鐵鑛產業ニ對スル基本原料ノ獲得ノ要請ヲ集注的ニ表現シテヰルモノデアル。更ニ大寶炭礦五鑛區ガ三菱合資會社ニ特種工業助長ノ目的デ下附セラレタト云フ事實ハ内地ニ於ケル石炭財閥ニ對スル政府ノ手厚キ保護政策ト軌ヲ一ニスルモノデアリ、朝鮮炭礦業ノ方向ヲ示スモノトシテ注目ニ値スル。

其後第一次世界大戰ニヨル好況ニヨリ大正八年ニハ各地ニ稼行ヲ開始スルモノ多ク、前年度ニ對シ許可件數ハ六四%モ增加シ、就中平壤、江東、大寶ノ各炭礦ハ規模ノ擴張ヲ行ヒ、一方同年六月電氣興業株式會社ハ江東郡保留鑛區ノ許可ヲ受ケ、同九年ニハ江東炭礦本坑ヲ開坑、明治鑛業株式會社ノ大成炭礦モ大正八年ニハ命名ヲナサレ、十年ニハ大體總

テノ施設ヲ完成シ、朝鮮電氣興業株式會社ノ貞柏坑ノ開坑モ行ハレタ。

他方大正十一年四月平壤鑛業所ノ施設一切及炭田ノ一部ヲ海軍省ニ移管シ、爾來同省ハ海軍燃料廠平壤鑛業部ヲ設置シタノデアツタ。

而シ大正十三年迄ハ平壤鑛業所、江西、大寶、江東、貞柏里ノ五坑ノミガ一万瓲ヲ超エ得ルノミデアツタガ、大正十四年無煙炭ノ朝鮮外輸出ガ開放セラレテヨリ急速ニ出炭増加シ、三五万九千屯トナリ、内地移出モ十三年ニハ一四三〇〇〇餘屯デアツタガ、十四年ニハ二〇万屯餘トナツタ。

朝鮮無煙炭發達史ヲ劃期スベキ重要事ハ昭和二年二月資本金一千万圓拂込二百五十万圓ノ朝鮮無煙炭株式會社ノ創立デアル。卽チ大正十五年無煙炭田開發ノ爲平安南道保留炭田ノ開放ニ決シ、此レト民有未着手區域百二十鑛區ヲ合併シ三井、三菱、明治、久原等ノ内地有力資本ノ誘致ヲナサントシテ當社ヲ創立セシメ、總督府保留鑛區三十餘ケ所ヲ無償ニテ讓與シ、朝鮮採炭機構ニ關スル限リニ於テ、内地當該財閥ノ間ニ一應ノ停戰協定ガ成立シタト同時ニ、三菱ノ制覇ガ確立シタト見ルベキデア

リ、ソレト同時ニ此處ニモ財閥ニ對スル總督府ノ手厚キ保護ガ見ラレルノデアル。

其他朝鮮電氣興業株式會社ノ大文山炭礦ノ開坑、鬪慶炭礦ノ開坑ト年々無煙炭礦開坑セラレ、昭和三年ニハ總出炭四六四〇〇〇屯トナッタノデアル。

輸送ハ當時平壤鑛業所及大成炭礦ノ兩者以外ノ大部分ハ大同江ノ水運ニヨリ保山ニ出シ、コヽニテ一時貯炭シ、後夏期ヨリ秋期ニカケ汽船ニテ輸送ヲナシテヰタ。

有煙炭田ノ開發ハ明治四十一年生氣嶺炭礦ノ開坑ヲ以テ嚆矢トシ、其後各所ノ炭礦ガ開坑セラレ、鮮內工業化ノ進展ニ照應シツヽ確實ナ發展ヲ示シ、特ニ最近ノ有煙炭不足ニ刺戟サレテ、十四年以降增產ニ拍車ヲカケテヰル。

要スルニ、無煙炭ハ平壤海軍炭礦ヲ基軸トシ、コレニ內地採炭財閥ガ「保留炭田ノ無償下附」ニヨリ外地的特別利潤ノ手厚イ官府ノ保護ノ下ニ着實ナ發展ヲ遂ゲタノデアッタ。更ニ具體的ニ資本關係ヲ見ルナラバ

（詳細ハ後章）、朝鮮無煙炭ノ大約五〇％ヲ產出シ來ツタ朝鮮無煙炭株式會社ハ東拓三二％、三菱二八％ノ出資率ニヨリ、事實上全ク三菱財閥ノ支配下ニ置カレタモノデアリ、其他炭礦ニ於テモ大東鑛業ニ對スル片倉系ノ一〇〇％支配、三陟ニ對スル日本電力（從來七％十四年以降四七％）、全南鑛業ニ對スル鐘淵實業ノ完全支配、恩波無煙ニ對スル日產化學ノ直營等々、內地財閥ニヨル支配權掌握下ニ發展シ來ツタ事ガ朝鮮ニ於ケル無煙炭發展史ノ或ル意味ニ於テ特異ナ型ヲ打チ出シテヰル。

一方有煙炭ニ於ケル發展ハ質的ニモ量的ニモ內地巨大資本ヲ誘引スベキ條件ヲ有セズ、朝鮮地內ニ於ケル內地資本ノ移入ニヨル大工業ノ展開ニヨリ始メテ有煙炭礦ハ其ノ成立ノ基礎ヲ得、其後內地炭ノ脅威ヲ常ニ受ケサガラモ、地理的近接ト外地的低賃銀ヲ以テ中小資本ノ手ニヨリ育成セラレ來ツタノデアル。然ルニ水力發電事業ニ於ケル劃期的技術ノ發展ヲ契機トスル北鮮ノ金屬、化學工業ノ發展ハ地內有煙炭ニ對スル需要ヲ飛躍的ニ增大セシメ、之ニ對應シテ日窒系資本ノ有煙炭礦業ヘノ進出ヲ見タノミナラズ、諸他ノ炭礦モ一齊ニ全能力ヲ擧ゲテ增產ニ向ヒ、其

ノ發展ニハ目覺シイモノガアルト云ヘル。

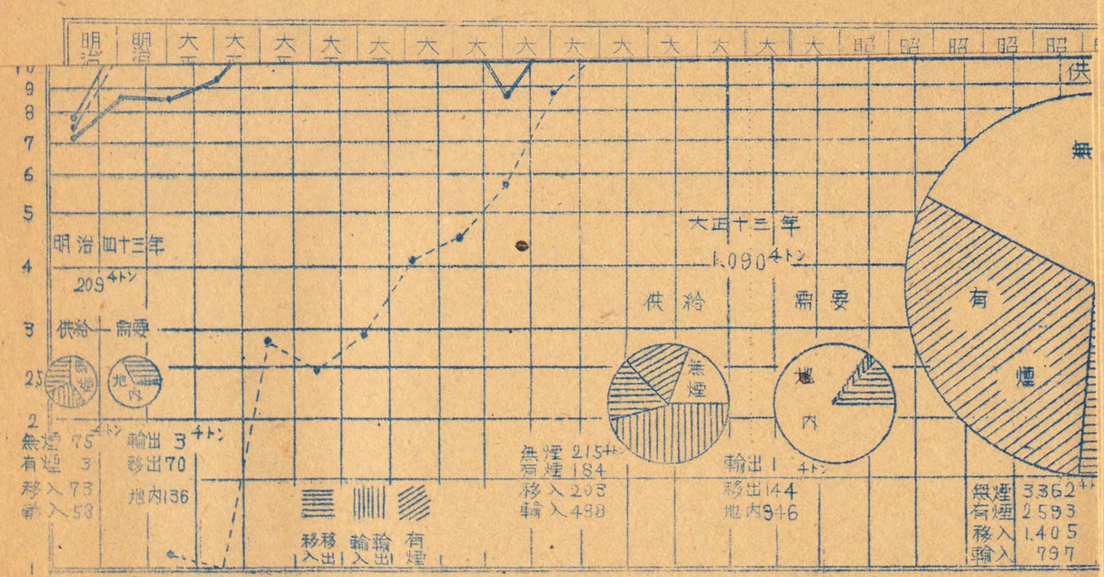
ヨリ具體的ニ發展ノ實狀ヲ示スタメニ次表第二表及第三表ニ一括シテ掲ゲルコトトシタ。

昭和十五年		石炭配給調整規則（八月） 日本石炭株式会社設立（六月） 増産奨励金・新坑開発助成金交附規則 石炭品位取締規則（四月）	
昭和十四年	朝鮮石炭配給統制規則発布（十一月） 朝鮮無煙炭配給統制組合成立（二月）	半島人入山（十一月） 石炭販売取締規則（八月）	賃銀臨時措置令（十月） 九・一八価格停止令（九月） 賃銀統制令（三月） 従業者雇入制限令（三月）
昭和十三年	重要鉱物増産令（五月） 鉱夫労務扶助規則発布（三月） 朝鮮鉱業警察規則発布（一月）	石炭配給統制規則（九月） 炭價引下命令（九月） 重要鉱物増産法（六月）	第二次世界大戦始まる（九月） 国家総動員法（四月）
昭和十二年	[illegible]（十二月）	[illegible]	臨時措置法（九月）

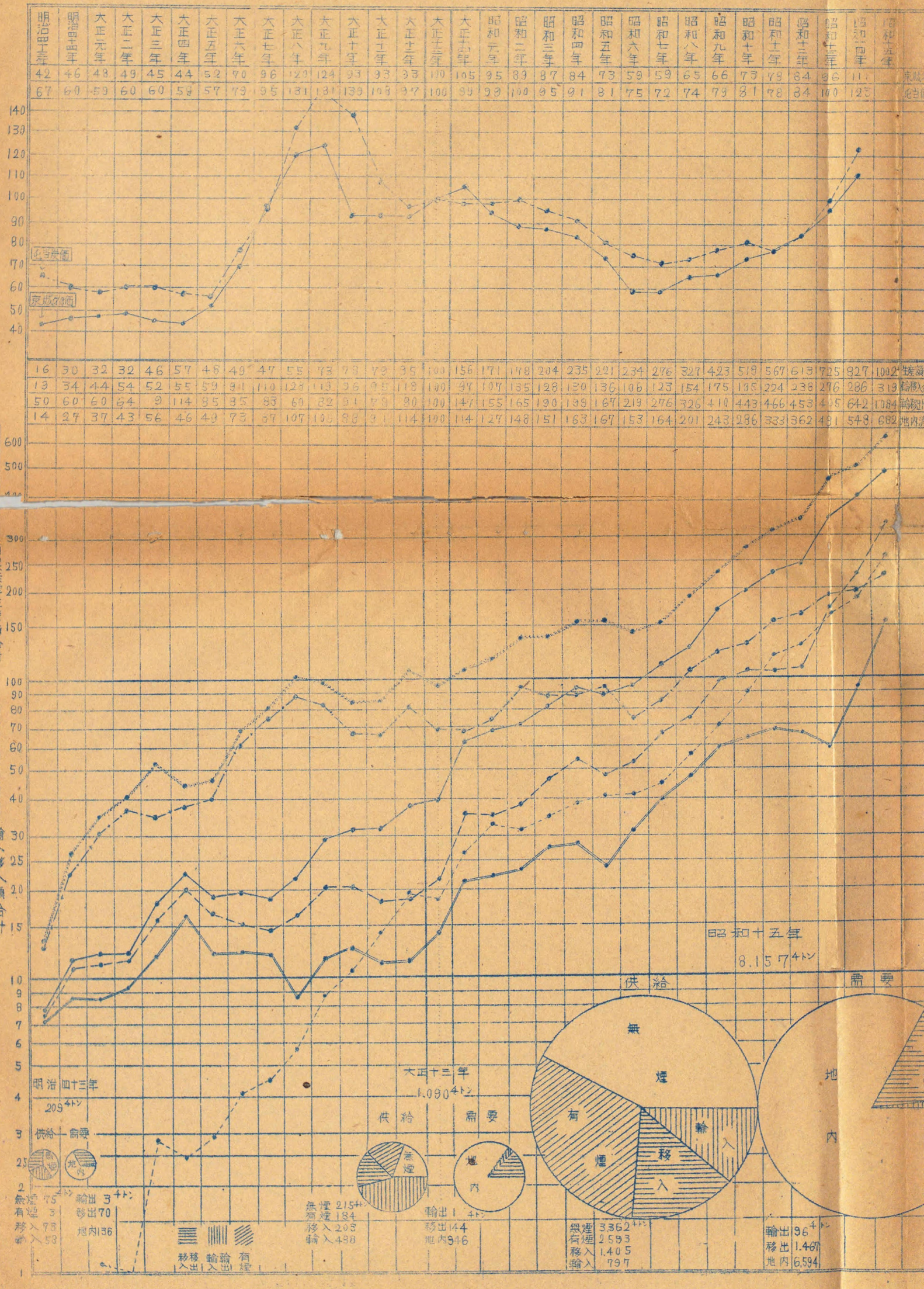
重要年表

年	朝鮮石炭関係事項	石炭関係重要事項	経済的基礎過程
明治四十三年	生気嶺炭砿開坑	三井中央坑竪坑竣工（竪坑時代ヘノ技術的劃期）	日韓合併（八月）
明治四十四年			韓国銀行ヲ朝鮮銀行ニ改ム（八月）
大正元年			外資輸入ノ杜絶
大正二年	大宝炭砿五砿区三菱ニ下附、咸北炭砿開坑		景氣沈衰ノ底ニ達ス
大正三年	會寧炭砿開坑	北海道石炭鉱業会設立	第一次世界大戦始まる（七月）
大正四年	朝鮮鉱業令		
大正五年	大宝炭砿開坑、朝鮮鉱業令施行細則及朝鮮鉱業登録規則施行		工場法実施
大正六年			物價調節省令公布
大正七年	江西炭砿開坑		米價暴騰、本格的金融資本確立
大正八年		未曽有ノ石炭好況	講和條約成立
大正九年			大恐慌襲来（三月）
大正十年	貞柏坑開坑	送炭制限、石炭聯合会設立（十月）	
大正十一年	総督府燃料選鉱研究所開設、平壌鉱業所ノ海軍移管		
大正十二年		撫順炭販売株式会社設立	関東大震災
大正十三年		撫順炭輸入量協定開始	
大正十四年	無煙炭輸出開放	再度送炭制限、炭業救済同盟会設立、[illegible]送炭制限撤廃	
昭和元年	平安南道保留炭田開放、朝鮮無煙炭株式会社設立（[illegible]）		朝鮮産米増殖計画実施
昭和二年	国慶、大文山、三神、文川等開坑		台銀ノ不良貸付暴露、金融恐慌ノ発端
昭和三年	昭和、旭等開坑		
昭和四年	[illegible]慶州、遊仙、訓戎、阿吾地、[illegible]等開坑		
昭和五年		[illegible]聯合会[illegible]（[illegible]九万瓲ニ達ス）	各市場大暴落、金輸出解禁、世界恐慌ノ発端
昭和六年			金輸出再禁止（十二月）、満洲事変勃発（九月）、農村窮乏ノ極ニ達ス
昭和七年		年末ニ至リ炭界好転、昭和石炭株式会社設立	
昭和八年	朝鮮鉱業令改正（一月）	送炭制限緩和	
昭和九年		重要産業統制法ノ石炭界ヘノ適用	軍需跛行景気
昭和十年			
昭和十一年			低金利工作
昭和十二年	石炭五ケ年増産計画（十二月）	聯合会ノ送炭制限撤廃	臨時措置法（九月）、支那事変発生（七月）
昭和十三年	朝鮮重要鉱物増産令（五月）、朝鮮鉱夫労務扶助規則発布（三月）、朝鮮鉱業警察規則発布（一月）	石炭配給統制規則（九月）、石炭價引下命令（九月）、重要鉱物増産法（六月）	第二次世界大戦始まる（九月）、国家総動員法（四月）
昭和十四年	朝鮮石炭配給統制規則発布（十二月）、朝鮮無煙炭配給統制組合成立（三月）	半島人入山（十一月）、石炭販売取締規則（八月）	賃銀臨時措置令（十一月）、九・一八価格停止令（九月）、賃銀統制令（三月）、従業者雇入制限令（三月）
昭和十五年		石炭配給調整規則（八月）、日本石炭株式会社設立（六月）、増産奨励金新坑開発助成金交附規則、石炭品位取締規則（四月）	

朝鮮石炭事情累年一


明治四十三年
209千トン
供給
需要
大正十三年
1090千トン
供給
需要
無煙 75
有煙 3
移入 73
輸入 58
輸出 3千トン
移出 70
地内 136
無煙 215千トン
有煙 184
移入 203
輸入 498
輸出 1千トン
移出 144
地内 946
無煙 3362千トン
有煙 2593
移入 1405
輸入 797
移出入
輸出入
有煙

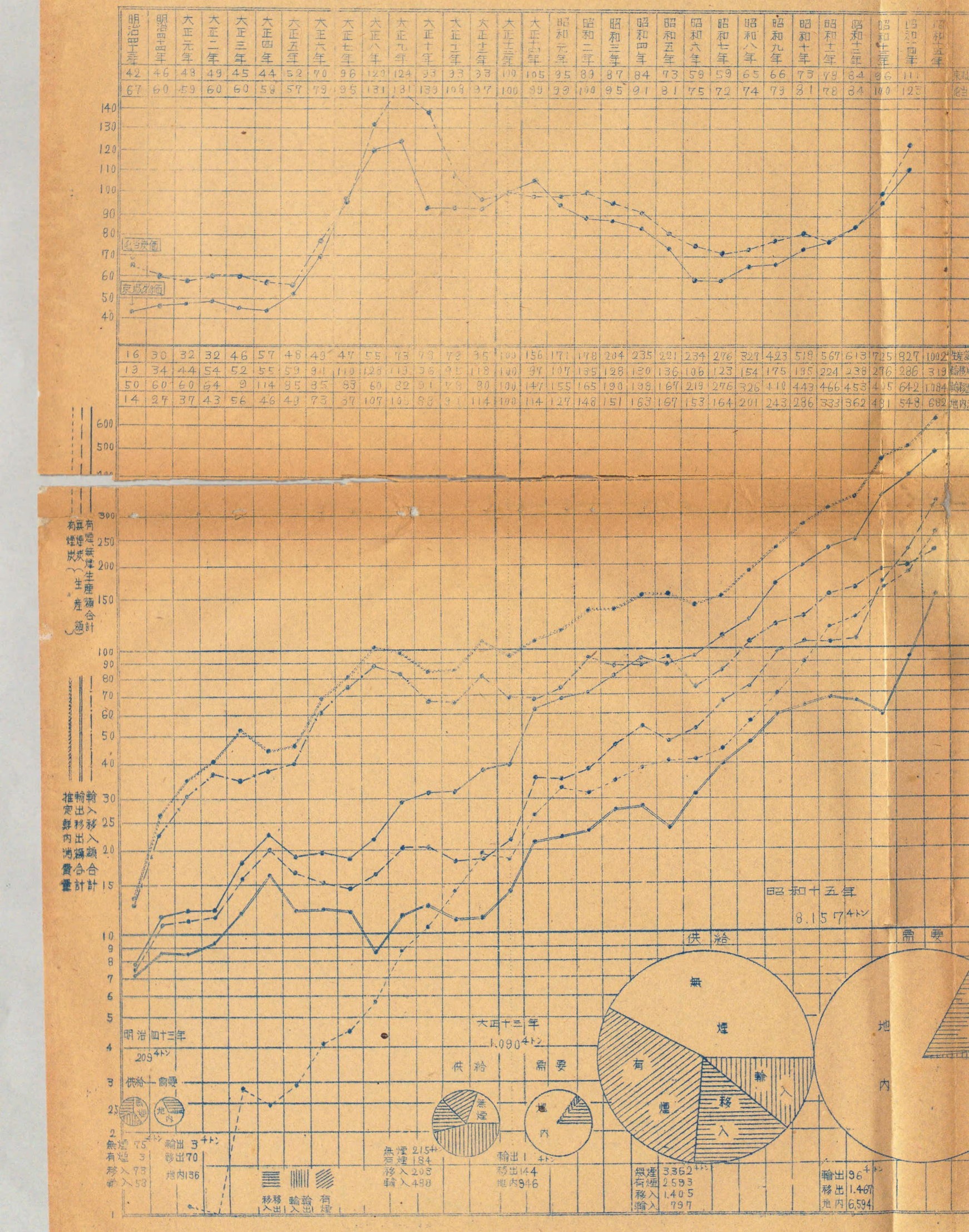
朝鮮石炭事情累年一覧表



鉄鋼石産業指数表

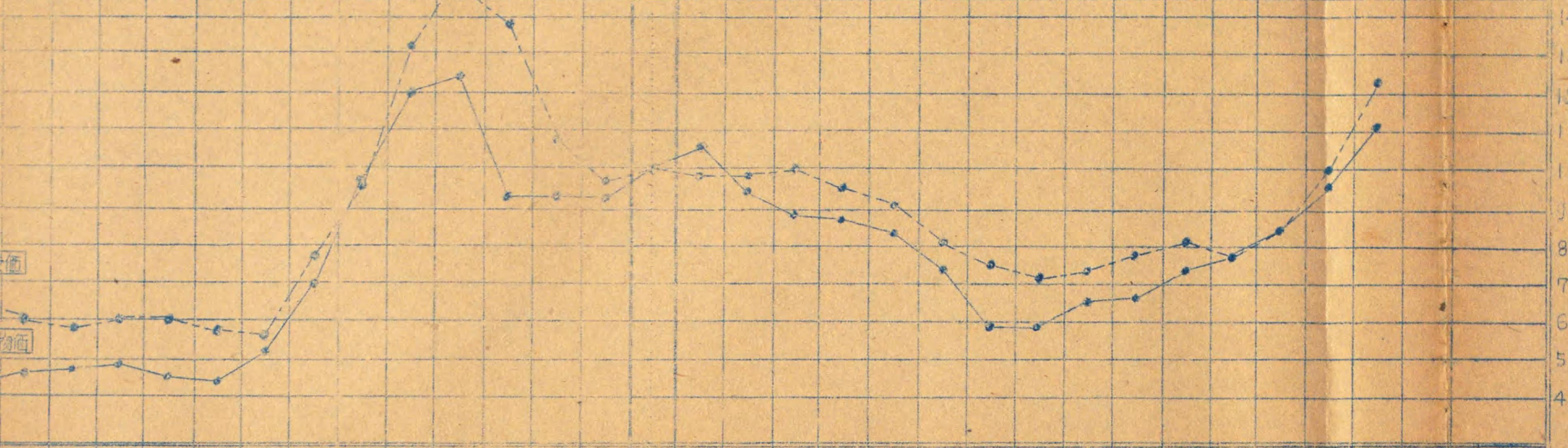
| 明治 | 大正元年 | 大正二年 | 大正三年 | 大正四年 | 大正五年 | 大正六年 | 大正七年 | 大正八年 | 大正九年 | 大正十年 | 大正十一年 | 大正十二年 | 昭和元年 | 昭和二年 | 昭和三年 | 昭和四年 | 昭和五年 | 昭和六年 | 昭和七年 | 昭和八年 | 昭和九年 | 昭和十年 | 昭和十一年 | 昭和十二年 | 昭和十三年 | 昭和十四年 | 昭和十五年 | 昭和十六年 | 昭和十七年 | 昭和十八年 | 昭和十九年 | 昭和二十年 | 昭和二十一年 | 昭和二十二年 | 昭和二十三年 | 昭和二十四年 | 昭和二十五年 | 昭和二十六年 | 昭和二十七年 | 昭和二十八年 | 昭和二十九年 | 昭和三十年 | 昭和三十一年 | 昭和三十二年 | 昭和三十三年 | 昭和三十四年 | 昭和三十五年 | 昭和三十六年 | 昭和三十七年 | 昭和三十八年 | 昭和三十九年 | 昭和四十年 | 昭和四十一年 | 昭和四十二年 | 昭和四十三年 | 昭和四十四年 | 昭和四十五年 | 昭和四十六年 | 昭和四十七年 | 昭和四十八年 | 昭和四十九年 | 昭和五十年 | 昭和五十一年 | 昭和五十二年 | 昭和五十三年 | 昭和五十四年 | 昭和五十五年 | 昭和五十六年 | 昭和五十七年 | 昭和五十八年 | 昭和五十九年 | 昭和六十年 | 昭和六十一年 | 昭和六十二年 | 昭和六十三年 | 平成元年 | 平成二年 | 平成三年 | 平成四年 | 平成五年 | 平成六年 | 平成七年 | 平成八年 | 平成九年 | 平成十年 | 平成十一年 | 平成十二年 | 平成十三年 | 平成十四年 | 平成十五年 | 平成十六年 | 平成十七年 | 平成十八年 | 平成十九年 | 平成二十年 | 平成二十一年 | 平成二十二年 | 平成二十三年 | 平成二十四年 | 平成二十五年 | 平成二十六年 | 平成二十七年 | 平成二十八年 | 平成二十九年 | 平成三十年 | 平成三十一年 | 平成三十二年 | 平成三十三年 | 平成三十四年 | 平成三十五年 | 平成三十六年 | 平成三十七年 | 平成三十八年 | 平成三十九年 | 平成四十年 | 平成四十一年 | 平成四十二年 | 平成四十三年 | 平成四十四年 | 平成四十五年 | 平成四十六年 | 平成四十七年 | 平成四十八年 | 平成四十九年 | 平成五十年 | 平成五十一年 | 平成五十二年 | 平成五十三年 | 平成五十四年 | 平成五十五年 | 平成五十六年 | 平成五十七年 | 平成五十八年 | 平成五十九年 | 平成六十年 | 平成六十一年 | 平成六十二年 | 平成六十三年 | 平成六十四年 | 平成六十五年 | 平成六十六年 | 平成六十七年 | 平成六十八年 | 平成六十九年 | 平成七十年 | 平成七十一年 | 平成七十二年 | 平成七十三年 | 平成七十四年 | 平成七十五年 | 平成七十六年 | 平成七十七年 | 平成七十八年 | 平成七十九年 | 平成八十年 | 平成八十一年 | 平成八十二年 | 平成八十三年 | 平成八十四年 | 平成八十五年 | 平成八十六年 | 平成八十七年 | 平成八十八年 | 平成八十九年 | 平成九十年 | 平成九十一年 | 平成九十二年 | 平成九十三年 | 平成九十四年 | 平成九十五年 | 平成九十六年 | 平成九十七年 | 平成九十八年 | 平成九十九年 | 平成百年 | 平成百一年 | 平成百二年 | 平成百三年 | 平成百四年 | 平成百五年 | 平成百六年 | 平成百七年 | 平成百八年 | 平成百九年 | 平成百十年 | 平成百十一年 | 平成百十二年 | 平成百十三年 | 平成百十四年 | 平成百十五年 | 平成百十六年 | 平成百十七年 | 平成百十八年 | 平成百十九年 | 平成百二十年 | 平成百二十一年 | 平成百二十二年 | 平成百二十三年 | 平成百二十四年 | 平成百二十五年 | 平成百二十六年 | 平成百二十七年 | 平成百二十八年 | 平成百二十九年 | 平成百三十年 | 平成百三十一年 | 平成百三十二年 | 平成百三十三年 | 平成百三十四年 | 平成百三十五年 | 平成百三十六年 | 平成百三十七年 | 平成百三十八年 | 平成百三十九年 | 平成百四十年 | 平成百四十一年 | 平成百四十二年 | 平成百四十三年 | 平成百四十四年 | 平成百四十五年 | 平成百四十六年 | 平成百四十七年 | 平成百四十八年 | 平成百四十九年 | 平成百五十年 | 平成百五十一年 | 平成百五十二年 | 平成百五十三年 | 平成百五十四年 | 平成百五十五年 | 平成百五十六年 | 平成百五十七年 | 平成百五十八年 | 平成百五十九年 | 平成百六十年 | 平成百六十一年 | 平成百六十二年 | 平成百六十三年 | 平成百六十四年 | 平成百六十五年 | 平成百六十六年 | 平成百六十七年 | 平成百六十八年 | 平成百六十九年 | 平成百七十年 | 平成百七十一年 | 平成百七十二年 | 平成百七十三年 | 平成百七十四年 | 平成百七十五年 | 平成百七十六年 | 平成百七十七年 | 平成百七十八年 | 平成百七十九年 | 平成百八十年 | 平成百八十一年 | 平成百八十二年 | 平成百八十三年 | 平成百八十四年 | 平成百八十五年 | 平成百八十六年 | 平成百八十七年 | 平成百八十八年 | 平成百八十九年 | 平成百九十年 | 平成百九十一年 | 平成百九十二年 | 平成百九十三年 | 平成百九十四年 | 平成百九十五年 | 平成百九十六年 | 平成百九十七年 | 平成百九十八年 | 平成百九十九年 | 平成二百年 | 平成二百一年 | 平成二百二年 | 平成二百三年 | 平成二百四年 | 平成二百五年 | 平成二百六年 | 平成二百七年 | 平成二百八年 | 平成二百九年 | 平成二百十年 | 平成二百十一年 | 平成二百十二年 | 平成二百十三年 | 平成二百十四年 | 平成二百十五年 | 平成二百十六年 | 平成二百十七年 | 平成二百十八年 | 平成二百十九年 | 平成二百二十年 | 平成二百二十一年 | 平成二百二十二年 | 平成二百二十三年 | 平成二百二十四年 | 平成二百二十五年 | 平成二百二十六年 | 平成二百二十七年 | 平成二百二十八年 | 平成二百二十九年 | 平成二百三十年 | 平成二百三十一年 | 平成二百三十二年 | 平成二百三十三年 | 平成二百三十四年 | 平成二百三十五年 | 平成二百三十六年 | 平成二百三十七年 | 平成二百三十八年 | 平成二百三十九年 | 平成二百四十年 | 平成二百四十一年 | 平成二百四十二年 | 平成二百四十三年 | 平成二百四十四年 | 平成二百四十五年 | 平成二百四十六年 | 平成二百四十七年 | 平成二百四十八年 | 平成二百四十九年 | 平成二百五十年 | 平成二百五十一年 | 平成二百五十二年 | 平成二百五十三年 | 平成二百五十四年 | 平成二百五十五年 | 平成二百五十六年 | 平成二百五十七年 | 平成二百五十八年 | 平成二百五十九年 | 平成二百六十年 | 平成二百六十一年 | 平成二百六十二年 | 平成二百六十三年 | 平成二百六十四年 | 平成二百六十五年 | 平成二百六十六年 | 平成二百六十七年 | 平成二百六十八年 | 平成二百六十九年 | 平成二百七十年 | 平成二百七十一年 | 平成二百七十二年 | 平成二百七十三年 | 平成二百七十四年 | 平成二百七十五年 | 平成二百七十六年 | 平成二百七十七年 | 平成二百七十八年 | 平成二百七十九年 | 平成二百八十年 | 平成二百八十一年 | 平成二百八十二年 | 平成二百八十三年 | 平成二百八十四年 | 平成二百八十五年 | 平成二百八十六年 | 平成二百八十七年 | 平成二百八十八年 | 平成二百八十九年 | 平成二百九十年 | 平成二百九十一年 | 平成二百九十二年 | 平成二百九十三年 | 平成二百九十四年 | 平成二百九十五年 | 平成二百九十六年 | 平成二百九十七年 | 平成二百九十八年 | 平成二百九十九年 | 平成三百年 | 平成三百一年 | 平成三百二年 | 平成三百三年 | 平成三百四年 | 平成三百五年 | 平成三百六年 | 平成三百七年 | 平成三百八年 | 平成三百九年 | 平成三百十年 | 平成三百十一年 | 平成三百十二年 | 平成三百十三年 | 平成三百十四年 | 平成三百十五年 | 平成三百十六年 | 平成三百十七年 | 平成三百十八年 | 平成三百十九年 | 平成三百二十年 | 平成三百二十一年 | 平成三百二十二年 | 平成三百二十三年 | 平成三百二十四年 | 平成三百二十五年 | 平成三百二十六年 | 平成三百二十七年 | 平成三百二十八年 | 平成三百二十九年 | 平成三百三十年 | 平成三百三十一年 | 平成三百三十二年 | 平成三百三十三年 | 平成三百三十四年 | 平成三百三十五年 | 平成三百三十六年 | 平成三百三十七年 | 平成三百三十八年 | 平成三百三十九年 | 平成三百四十年 | 平成三百四十一年 | 平成三百四十二年 | 平成三百四十三年 | 平成三百四十四年 | 平成三百四十五年 | 平成三百四十六年 | 平成三百四十七年 | 平成三百四十八年 | 平成三百四十九年 | 平成三百五十年 | 平成三百五十一年 | 平成三百五十二年 | 平成三百五十三年 | 平成三百五十四年 | 平成三百五十五年 | 平成三百五十六年 | 平成三百五十七年 | 平成三百五十八年 | 平成三百五十九年 | 平成三百六十年 | 平成三百六十一年 | 平成三百六十二年 | 平成三百六十三年 | 平成三百六十四年 | 平成三百六十五年 | 平成三百六十六年 | 平成三百六十七年 | 平成三百六十八年 | 平成三百六十九年 | 平成三百七十年 | 平成三百七十一年 | 平成三百七十二年 | 平成三百七十三年 | 平成三百七十四年 | 平成三百七十五年 | 平成三百七十六年 | 平成三百七十七年 | 平成三百七十八年 | 平成三百七十九年 | 平成三百八十年 | 平成三百八十一年 | 平成三百八十二年 | 平成三百八十三年 | 平成三百八十四年 | 平成三百八十五年 | 平成三百八十六年 | 平成三百八十七年 | 平成三百八十八年 | 平成三百八十九年 | 平成三百九十年 | 平成三百九十一年 | 平成三百九十二年 | 平成三百九十三年 | 平成三百九十四年 | 平成三百九十五年 | 平成三百九十六年 | 平成三百九十七年 | 平成三百九十八年 | 平成三百九十九年 | 平成四百年 | 平成四百一年 | 平成四百二年 | 平成四百三年 | 平成四百四年 | 平成四百五年 | 平成四百六年 | 平成四百七年 | 平成四百八年 | 平成四百九年 | 平成四百十年 | 平成四百十一年 | 平成四百十二年 | 平成四百十三年 | 平成四百十四年 | 平成四百十五年 | 平成四百十六年 | 平成四百十七年 | 平成四百十八年 | 平成四百十九年 | 平成四百二十年 | 平成四百二十一年 | 平成四百二十二年 | 平成四百二十三年 | 平成四百二十四年 | 平成四百二十五年 | 平成四百二十六年 | 平成四百二十七年 | 平成四百二十八年 | 平成四百二十九年 | 平成四百三十年 | 平成四百三十一年 | 平成四百三十二年 | 平成四百三十三年 | 平成四百三十四年 | 平成四百三十五年 | 平成四百三十六年 | 平成四百三十七年 | 平成四百三十八年 | 平成四百三十九年 | 平成四百四十年 | 平成四百四十一年 | 平成四百四十二年 | 平成四百四十三年 | 平成四百四十四年 | 平成四百四十五年 | 平成四百四十六年 | 平成四百四十七年 | 平成四百四十八年 | 平成四百四十九年 | 平成四百五十年 | 平成四百五十一年 | 平成四百五十二年 | 平成四百五十三年 | 平成四百五十四年 | 平成四百五十五年 | 平成四百五十六年 | 平成四百五十七年 | 平成四百五十八年 | 平成四百五十九年 | 平成四百六十年 | 平成四百六十一年 | 平成四百六十二年 | 平成四百六十三年 | 平成四百六十四年 | 平成四百六十五年 | 平成四百六十六年 | 平成四百六十七年 | 平成四百六十八年 | 平成四百六十九年 | 平成四百七十年 | 平成四百七十一年 | 平成四百七十二年 | 平成四百七十三年 | 平成四百七十四年 | 平成四百七十五年 | 平成四百七十六年 | 平成四百七十七年 | 平成四百七十八年 | 平成四百七十九年 | 平成四百八十年 | 平成四百八十一年 | 平成四百八十二年 | 平成四百八十三年 | 平成四百八十四年 | 平成四百八十五年 | 平成四百八十六年 | 平成四百八十七年 | 平成四百八十八年 | 平成四百八十九年 | 平成四百九十年 | 平成四百九十一年 | 平成四百九十二年 | 平成四百九十三年 | 平成四百九十四年 | 平成四百九十五年 | 平成四百九十六年 | 平成四百九十七年 | 平成四百九十八年 | 平成四百九十九年 | 平成五百年 | 平成五百一年 | 平成五百二年 | 平成五百三年 | 平成五百四年 | 平成五百五年 | 平成五百六年 | 平成五百七年 | 平成五百八年 | 平成五百九年 | 平成五百十年 | 平成五百十一年 | 平成五百十二年 | 平成五百十三年 | 平成五百十四年 | 平成五百十五年 | 平成五百十六年 | 平成五百十七年 | 平成五百十八年 | 平成五百十九年 | 平成五百二十年 | 平成五百二十一年 | 平成五百二十二年 | 平成五百二十三年 | 平成五百二十四年 | 平成五百二十五年 | 平成五百二十六年 | 平成五百二十七年 | 平成五百二十八年 | 平成五百二十九年 | 平成五百三十年 | 平成五百三十一年 | 平成五百三十二年 | 平成五百三十三年 | 平成五百三十四年 | 平成五百三十五年 | 平成五百三十六年 | 平成五百三十七年 | 平成五百三十八年 | 平成五百三十九年 | 平成五百四十年 | 平成五百四十一年 | 平成五百四十二年 | 平成五百四十三年 | 平成五百四十四年 | 平成五百四十五年 | 平成五百四十六年 | 平成五百四十七年 | 平成五百四十八年 | 平成五百四十九年 | 平成五百五十年 | 平成五百五十一年 | 平成五百五十二年 | 平成五百五十三年 | 平成五百五十四年 | 平成五百五十五年 | 平成五百五十六年 | 平成五百五十七年 | 平成五百五十八年 | 平成五百五十九年 | 平成五百六十年 | 平成五百六十一年 | 平成五百六十二年 | 平成五百六十三年 | 平成五百六十四年 | 平成五百六十五年 | 平成五百六十六年 | 平成五百六十七年 | 平成五百六十八年 | 平成五百六十九年 | 平成五百七十年 | 平成五百七十一年 | 平成五百七十二年 | 平成五百七十三年 | 平成五百七十四年 | 平成五百七十五年 | 平成五百七十六年 | 平成五百七十七年 | 平成五百七十八年 | 平成五百七十九年 | 平成五百八十年 | 平成五百八十一年 | 平成五百八十二年 | 平成五百八十三年 | 平成五百八十四年 | 平成五百八十五年 | 平成五百八十六年 | 平成五百八十七年 | 平成五百八十八年 | 平成五百八十九年 | 平成五百九十年 | 平成五百九十一年 | 平成五百九十二年 | 平成五百九十三年 | 平成五百九十四年 | 平成五百九十五年 | 平成五百九十六年 | 平成五百九十七年 | 平成五百九十八年 | 平成五百九十九年 | 平成六百年 | 平成六百一年 | 平成六百二年 | 平成六百三年 | 平成六百四年 | 平成六百五年 | 平成六百六年 | 平成六百七年 | 平成六百八年 | 平成六百九年 | 平成六百十年 | 平成六百十一年 | 平成六百十二年 | 平成六百十三年 | 平成六百十四年 | 平成六百十五年 | 平成六百十六年 | 平成六百十七年 | 平成六百十八年 | 平成六百十九年 | 平成六百二十年 | 平成六百二十一年 | 平成六百二十二年 | 平成六百二十三年 | 平成六百二十四年 | 平成六百二十五年 | 平成六百二十六年 | 平成六百二十七年 | 平成六百二十八年 | 平成六百二十九年 | 平成六百三十年 | 平成六百三十一年 | 平成六百三十二年 | 平成六百三十三年 | 平成六百三十四年 | 平成六百三十五年 | 平成六百三十六年 | 平成六百三十七年 | 平成六百三十八年 | 平成六百三十九年 | 平成六百四十年 | 平成六百四十一年 | 平成六百四十二年 | 平成六百四十三年 | 平成六百四十四年 | 平成六百四十五年 | 平成六百四十六年 | 平成六百四十七年 | 平成六百四十八年 | 平成六百四十九年 | 平成六百五十年 | 平成六百五十一年 | 平成六百五十二年 | 平成六百五十三年 | 平成六百五十四年 | 平成六百五十五年 | 平成六百五十六年 | 平成六百五十七年 | 平成六百五十八年 | 平成六百五十九年 | 平成六百六十年 | 平成六百六十一年 | 平成六百六十二年 | 平成六百六十三年 | 平成六百六十四年 | 平成六百六十五年 | 平成六百六十六年 | 平成六百六十七年 | 平成六百六十八年 | 平成六百六十九年 | 平成六百七十年 | 平成六百七十一年 | 平成六百七十二年 | 平成六百七十三年 | 平成六百七十四年 | 平成六百七十五年 | 平成六百七十六年 | 平成六百七十七年 | 平成六百七十八年 | 平成六百七十九年 | 平成六百八十年 | 平成六百八十一年 | 平成六百八十二年 | 平成六百八十三年 | 平成六百八十四年 | 平成六百八十五年 | 平成六百八十六年 | 平成六百八十七年 | 平成六百八十八年 | 平成六百八十九年 | 平成六百九十年 | 平成六百九十一年 | 平成六百九十二年 | 平成六百九十三年 | 平成六百九十四年 | 平成六百九十五年 | 平成六百九十六年 | 平成六百九十七年 | 平成六百九十八年 | 平成六百九十九年 | 平成七百年 | 平成七百一年 | 平成七百二年 | 平成七百三年 | 平成七百四年 | 平成七百五年 | 平成七百六年 | 平成七百七年 | 平成七百八年 | 平成七百九年 | 平成七百十年 | 平成七百十一年 | 平成七百十二年 | 平成七百十三年 | 平成七百十四年 | 平成七百十五年 | 平成七百十六年 | 平成七百十七年 | 平成七百十八年 | 平成七百十九年 | 平成七百二十年 | 平成七百二十一年 | 平成七百二十二年 | 平成七百二十三年 | 平成七百二十四年 | 平成七百二十五年 | 平成七百二十六年 | 平成七百二十七年 | 平成七百二十八年 | 平成七百二十九年 | 平成七百三十年 | 平成七百三十一年 | 平成七百三十二年 | 平成七百三十三年 | 平成七百三十四年 | 平成七百三十五年 | 平成七百三十六年 | 平成七百三十七年 | 平成七百三十八年 | 平成七百三十九年 | 平成七百四十年 | 平成七百四十一年 | 平成七百四十二年 | 平成七百四十三年 | 平成七百四十四年 | 平成七百四十五年 | 平成七百四十六年 | 平成七百四十七年 | 平成七百四十八年 | 平成七百四十九年 | 平成七百五十年 | 平成七百五十一年 | 平成七百五十二年 | 平成七百五十三年 | 平成七百五十四年 | 平成七百五十五年 | 平成七百五十六年 | 平成七百五十七年 | 平成七百五十八年 | 平成七百五十九年 | 平成七百六十年 | 平成七百六十一年 | 平成七百六十二年 | 平成七百六十三年 | 平成七百六十四年 | 平成七百六十五年 | 平成七百六十六年 | 平成七百六十七年 | 平成七百六十八年 | 平成七百六十九年 | 平成七百七十年 | 平成七百七十一年 | 平成七百七十二年 | 平成七百七十三年 | 平成七百七十四年 | 平成七百七十五年 | 平成七百七十六年 | 平成七百七十七年 | 平成七百七十八年 | 平成七百七十九年 | 平成七百八十年 | 平成七百八十一年 | 平成七百八十二年 | 平成七百八十三年 | 平成七百八十四年 | 平成七百八十五年 | 平成七百八十六年 | 平成七百八十七年 | 平成七百八十八年 | 平成七百八十九年 | 平成七百九十年 | 平成七百九十一年 | 平成七百九十二年 | 平成七百九十三年 | 平成七百九十四年 | 平成七百九十五年 | 平成七百九十六年 | 平成七百九十七年 | 平成七百九十八年 | 平成七百九十九年 | 平成八百年 | 平成八百一年 | 平成八百二年 | 平成八百三年 | 平成八百四年 | 平成八百五年 | 平成八百六年 | 平成八百七年 | 平成八百八年 | 平成八百九年 | 平成八百十年 | 平成八百十一年 | 平成八百十二年 | 平成八百十三年 | 平成八百十四年 | 平成八百十五年 | 平成八百十六年 | 平成八百十七年 | 平成八百十八年 | 平成八百十九年 | 平成八百二十年 | 平成八百二十一年 | 平成八百二十二年 | 平成八百二十三年 | 平成八百二十四年 | 平成八百二十五年 | 平成八百二十六年 | 平成八百二十七年 | 平成八百二十八年 | 平成八百二十九年 | 平成八百三十年 | 平成八百三十一年 | 平成八百三十二年 | 平成八百三十三年 | 平成八百三十四年 | 平成八百三十五年 | 平成八百三十六年 | 平成八百三十七年 | 平成八百三十八年 | 平成八百三十九年 | 平成八百四十年 | 平成八百四十一年 | 平成八百四十二年 | 平成八百四十三年 | 平成八百四十四年 | 平成八百四十五年 | 平成八百四十六年 | 平成八百四十七年 | 平成八百四十八年 | 平成八百四十九年 | 平成八百五十年 | 平成八百五十一年 | 平成八百五十二年 | 平成八百五十三年 | 平成八百五十四年 | 平成八百五十五年 | 平成八百五十六年 | 平成八百五十七年 | 平成八百五十八年 | 平成八百五十九年 | 平成八百六十年 | 平成八百六十一年 | 平成八百六十二年 | 平成八百六十三年 | 平成八百六十四年 | 平成八百六十五年 | 平成八百六十六年 | 平成八百六十七年 | 平成八百六十八年 | 平成八百六十九年 | 平成八百七十年 | 平成八百七十一年 | 平成八百七十二年 | 平成八百七十三年 | 平成八百七十四年 | 平成八百七十五年 | 平成八百七十六年 | 平成八百七十七年 | 平成八百七十八年 | 平成八百七十九年 | 平成八百八十年 | 平成八百八十一年 | 平成八百八十二年 | 平成八百八十三年 | 平成八百八十四年 | 平成八百八十五年 | 平成八百八十六年 | 平成八百八十七年 | 平成八百八十八年 | 平成八百八十九年 | 平成八百九十年 | 平成八百九十一年 | 平成八百九十二年 | 平成八百九十三年 | 平成八百九十四年 | 平成八百九十五年 | 平成八百九十六年 | 平成八百九十七年 | 平成八百九十八年 | 平成八百九十九年 | 平成九百年 | 平成九百一年 | 平成九百二年 | 平成九百三年 | 平成九百四年 | 平成九百五年 | 平成九百六年 | 平成九百七年 | 平成九百八年 | 平成九百九年 | 平成九百十年 | 平成九百十一年 | 平成九百十二年 | 平成九百十三年 | 平成九百十四年 | 平成九百十五年 | 平成九百十六年 | 平成九百十七年 | 平成九百十八年 | 平成九百十九年 | 平成九百二十年 | 平成九百二十一年 | 平成九百二十二年 | 平成九百二十三年 | 平成九百二十四年 | 平成九百二十五年 | 平成九百二十六年 | 平成九百二十七年 | 平成九百二十八年 | 平成九百二十九年 | 平成九百三十年 | 平成九百三十一年 | 平成九百三十二年 | 平成九百三十三年 | 平成九百三十四年 | 平成九百三十五年 | 平成九百三十六年 | 平成九百三十七年 | 平成九百三十八年 | 平成九百三十九年 | 平成九百四十年 | 平成九百四十一年 | 平成九百四十二年 | 平成九百四十三年 | 平成九百四十四年 | 平成九百四十五年 | 平成九百四十六年 | 平成九百四十七年 | 平成九百四十八年 | 平成九百四十九年 | 平成九百五十年 | 平成九百五十一年 | 平成九百五十二年 | 平成九百五十三年 | 平成九百五十四年 | 平成九百五十五年 | 平成九百五十六年 | 平成九百五十七年 | 平成九百五十八年 | 平成九百五十九年 | 平成九百六十年 | 平成九百六十一年 | 平成九百六十二年 | 平成九百六十三年 | 平成九百六十四年 | 平成九百六十五年 | 平成九百六十六年 | 平成九百六十七年 | 平成九百六十八年 | 平成九百六十九年 | 平成九百七十年 | 平成九百七十一年 | 平成九百七十二年 | 平成九百七十三年 | 平成九百七十四年 | 平成九百七十五年 | 平成九百七十六年 | 平成九百七十七年 | 平成九百七十八年 | 平成九百七十九年 | 平成九百八十年 | 平成九百八十一年 | 平成九百八十二年 | 平成九百八十三年 | 平成九百八十四年 | 平成九百八十五年 | 平成九百八十六年 | 平成九百八十七年 | 平成九百八十八年 | 平成九百八十九年 | 平成九百九十年 | 平成九百九十一年 | 平成九百九十二年 | 平成九百九十三年 | 平成九百九十四年 | 平成九百九十五年 | 平成九百九十六年 | 平成九百九十七年 | 平成九百九十八年 | 平成九百九十九年 | 平成千年 | 平成千一年 | 平成千二年 | 平成千三年 | 平成千四年 | 平成千五年 | 平成千六年 | 平成千七年 | 平成千八年 | 平成千九年 | 平成千十年 | 平成千十一年 | 平成千十二年 | 平成千十三年 | 平成千十四年 | 平成千十五年 | 平成千十六年 | 平成千十七年 | 平成千十八年 | 平成千十九年 | 平成千二十年 | 平成千二十一年 | 平成千二十二年 | 平成千二十三年 | 平成千二十四年 | 平成千二十五年 | 平成千二十六年 | 平成千二十七年 | 平成千二十八年 | 平成千二十九年 | 平成千三十年 | 平成千三十一年 | 平成千三十二年 | 平成千三十三年 | 平成千三十四年 | 平成千三十五年 | 平成千三十六年 | 平成千三十七年 | 平成千三十八年 | 平成千三十九年 | 平成千四十年 | 平成千四十一年 | 平成千四十二年 | 平成千四十三年 | 平成千四十四年 | 平成千四十五年 | 平成千四十六年 | 平成千四十七年 | 平成千四十八年 | 平成千四十九年 | 平成千五十年 | 平成千五十一年 | 平成千五十二年 | 平成千五十三年 | 平成千五十四年 | 平成千五十五年 | 平成千五十六年 | 平成千五十七年 | 平成千五十八年 | 平成千五十九年 | 平成千六十年 | 平成千六十一年 | 平成千六十二年 | 平成千六十三年 | 平成千六十四年 | 平成千六十五年 | 平成千六十六年 | 平成千六十七年 | 平成千六十八年 | 平成千六十九年 | 平成千七十年 | 平成千七十一年 | 平成千七十二年 | 平成千七十三年 | 平成千七十四年 | 平成千七十五年 | 平成千七十六年 | 平成千七十七年 | 平成千七十八年 | 平成千七十九年 | 平成千八十年 | 平成千八十一年 | 平成千八十二年 | 平成千八十三年 | 平成千八十四年 | 平成千八十五年 | 平成千八十六年 | 平成千八十七年 | 平成千八十八年 | 平成千八十九年 | 平成千九十年 | 平成千九十一年 | 平成千九十二年 | 平成千九十三年 | 平成千九十四年 | 平成千九十五年 | 平成千九十六年 | 平成千九十七年 | 平成千九十八年 | 平成千九十九年 | 平成千百年 | 平成千百一年 | 平成千百二年 | 平成千百三年 | 平成千百四年 | 平成千百五年 | 平成千百六年 | 平成千百七年 | 平成千百八年 | 平成千百九年 | 平成千百十年 | 平成千百十一年 | 平成千百十二年 | 平成千百十三年 | 平成千百十四年 | 平成千百十五年 | 平成千百十六年 | 平成千百十七年 | 平成千百十八年 | 平成千百十九年 | 平成千百二十年 | 平成千百二十一年 | 平成千百二十二年 | 平成千百二十三年 | 平成千百二十四年 | 平成千百二十五年 | 平成千百二十六年 | 平成千百二十七年 | 平成千百二十八年 | 平成千百二十九年 | 平成千百三十年 | 平成千百三十一年 | 平成千百三十二年 | 平成千百三十三年 | 平成千百三十四年 | 平成千百三十五年 | 平成千百三十六年 | 平成千百三十七年 | 平成千百三十八年 | 平成千百三十九年 | 平成千百四十年 | 平成千百四十一年 | 平成千百四十二年 | 平成千百四十三年 | 平成千百四十四年 | 平成千百四十五年 | 平成千百四十六年 | 平成千百四十七年 | 平成千百四十八年 | 平成千百四十九年 | 平成千百五十年 | 平成千百五十一年 | 平成千百五十二年 | 平成千百五十三年 | 平成千百五十四年 | 平成千百五十五年 | 平成千百五十六年 | 平成千百五十七年 | 平成千百五十八年 | 平成千百五十九年 | 平成千百六十年 | 平成千百六十一年 | 平成千百六十二年 | 平成千百六十三年 | 平成千百六十四年 | 平成千百六十五年 | 平成千百六十六年 | 平成千百六十七年 | 平成千百六十八年 | 平成千百六十九年 | 平成千百七十年 | 平成千百七十一年 | 平成千百七十二年 | 平成千百七十三年 | 平成千百七十四年 | 平成千百七十五年 | 平成千百七十六年 | 平成千百七十七年 | 平成千百七十八年 | 平成千百七十九年 | 平成千百八十年 | 平成千百八十一年 | 平成千百八十二年 | 平成千百八十三年 | 平成千百八十四年 | 平成千百八十五年 | 平成千百八十六年 | 平成千百八十七年 | 平成千百八十八年 | 平成千百八十九年 | 平成千百九十年 | 平成千百九十一年 | 平成千百九十二年 | 平成千百九十三年 | 平成千百九十四年 | 平成千百九十五年 | 平成千百九十六年 | 平成千百九十七年 | 平成千百九十八年 | 平成千百九十九年 | 平成千二百年 | 平成千二百一年 | 平成千二百二年 | 平成千二百三年 | 平成千二百四年 | 平成千二百五年 | 平成千二百六年 | 平成千二百七年 | 平成千二百八年 | 平成千二百九年 | 平成千二百十年 | 平成千二百十一年 | 平成千二百十二年 | 平成千二百十三年 | 平成千二百十四年 | 平成千二百十五年 | 平成千二百十六年 | 平成千二百十七年 | 平成千二百十八年 | 平成千二百十九年 | 平成千二百二十年 | 平成千二百二十一年 | 平成千二百二十二年 | 平成千二百二十三年 | 平成千二百二十四年 | 平成千二百二十五年 | 平成千二百二十六年 | 平成千二百二十七年 | 平成千二百二十八年 | 平成千二百二十九年 | 平成千二百三十年 | 平成千二百三十一年 | 平成千二百三十二年 | 平成千二百三十三年 | 平成千二百三十四年 | 平成千二百三十五年 | 平成千二百三十六年 | 平成千二百三十七年 | 平成千二百三十八年 | 平成千二百三十九年 | 平成千二百四十年 | 平成千二百四十一年 | 平成千二百四十二年 | 平成千二百四十三年 | 平成千二百四十四年 | 平成千二百四十五年 | 平成千二百四十六年 | 平成千二百四十七年 | 平成千二百四十八年 | 平成千二百四十九年 | 平成千二百五十年 | 平成千二百五十一年 | 平成千二百五十二年 | 平成千二百五十三年 | 平成千二百五十四年 | 平成千二百五十五年 | 平成千二百五十六年 | 平成千二百五十七年 | 平成千二百五十八年 | 平成千二百五十九年 | 平成千二百六十年 | 平成千二百六十一年 | 平成千二百六十二年 | 平成千二百六十三年 | 平成千二百六十四年 | 平成千二百六十五年 | 平成千二百六十六年 | 平成千二百六十七年 | 平成千二百六十八年 | 平成千二百六十九年 | 平成千二百七十年 | 平成千二百七十一年 | 平成千二百七十二年 | 平成千二百七十三年 | 平成千二百七十四年 | 平成千二百七十五年 | 平成千二百七十六年 | 平成千二百七十七年 | 平成千二百七十八年 | 平成千二百七十九年 | 平成千二百八十年 | 平成千二百八十一年 | 平成千二百八十二年 | 平成千二百八十三年 | 平成千二百八十四年 | 平成千二百八十五年 | 平成千二百八十六年 | 平成千二百八十七年 | 平成千二百八十八年 | 平成千二百八十九年 | 平成千二百九十年 | 平成千二百九十一年 | 平成千二百九十二年 | 平成千二百九十三年 | 平成千二百九十四年 | 平成千二百九十五年 | 平成千二百九十六年 | 平成千二百九十七年 | 平成千二百九十八年 | 平成千二百九十九年 | 平成千三百年 | 平成千三百一年 | 平成千三百二年 | 平成千三百三年 | 平成千三百四年 | 平成千三百五年 | 平成千三百六年 | 平成千三百七年 | 平成千三百八年 | 平成千三百九年 | 平成千三百十年 | 平成千三百十一年 | 平成千三百十二年 | 平成千三百十三年 | 平成千三百十四年 | 平成千三百十五年 | 平成千三百十六年 | 平成千三百十七年 | 平成千三百十八年 | 平成千三百十九年 | 平成千三百二十年 | 平成千三百二十一年 | 平成千三百二十二年 | 平成千三百二十三年 | 平成千三百二十四年 | 平成千三百二十五年 | 平成千三百二十六年 | 平成千三百二十七年 | 平成千三百二十八年 | 平成千三百二十九年 | 平成千三百三十年 | 平成千三百三十一年 | 平成千三百三十二年 | 平成千三百三十三年 | 平成千三百三十四年 | 平成千三百三十五年 | 平成千三百三十六年 | 平成千三百三十七年 | 平成千三百三十八年 | 平成千三百三十九年 | 平成千三百四十年 | 平成千三百四十一年 | 平成千三百四十二年 | 平成千三百四十三年 | 平成千三百四十四年 | 平成千三百四十五年 | 平成千三百四十六年 | 平成千三百四十七年 | 平成千三百四十八年 | 平成千三百四十九年 | 平成千三百五十年 | 平成千三百五十一年 | 平成千三百五十二年 | 平成千三百五十三年 | 平成千三百五十四年 | 平成千三百五十五年 | 平成千三百五十六年 | 平成千三百五十七年 | 平成千三百五十八年 | 平成千三百五十九年 | 平成千三百六十年 | 平成千三百六十一年 | 平成千三百六十二年 | 平成千三百六十三年 | 平成千三百六十四年 | 平成千三百六十五年 | 平成千三百六十六年 | 平成千三百六十七年 | 平成千三百六十八年 | 平成千三百六十九年 | 平成千三百七十年 | 平成千三百七十一年 | 平成千三百七十二年 | 平成千三百七十三年 | 平成千三百七十四年 | 平成千三百七十五年 | 平成千三百七十六年 | 平成千三百七十七年 | 平成千三百七十八年 | 平成千三百七十九年 | 平成千三百八十年 | 平成千三百八十一年 | 平成千三百八十二年 | 平成千三百八十三年 | 平成千三百八十四年 | 平成千三百八十五年 | 平成千三百八十六年 | 平成千三百八十七年 | 平成千三百八十八年 | 平成千三百八十九年 | 平成千三百九十年 | 平成千三百九十一年 | 平成千三百九十二年 | 平成千三百九十三年 | 平成千三百九十四年 | 平成千三百九十五年 | 平成千三百九十六年 | 平成千三百九十七年 | 平成千三百九十八年 | 平成千三百九十九年 | 平成千四百年 | 平成千四百一年 | 平成千四百二年 | 平成千四百三年 | 平成千四百四年 | 平成千四百五年 | 平成千四百六年 | 平成千四百七年 | 平成千四百八年 | 平成千四百九年 | 平成千四百十年 | 平成千四百十一年 | 平成千四百十二年 | 平成千四百十三年 | 平成千四百十四年 | 平成千四百十五年 | 平成千四百十六年 | 平成千四百十七年 | 平成千四百十八年 | 平成千四百十九年 | 平成千四百二十年 | 平成千四百二十一年 | 平成千四百二十二年 | 平成千四百二十三年 | 平成千四百二十四年 | 平成千四百二十五年 | 平成千四百二十六年 | 平成千四百二十七年 | 平成千四百二十八年 | 平成千四百二十九年 | 平成千四百三十年 | 平成千四百三十一年 | 平成千四百三十二年 | 平成千四百三十三年 | 平成千四百三十四年 | 平成千四百三十五年 | 平成千四百三十六年 | 平成千四百三十七年 | 平成千四百三十八年 | 平成千四百三十九年 | 平成千四百四十年 | 平成千四百四十一年 | 平成千四百四十二年 | 平成千四百四十三年 | 平成千四百四十四年 | 平成千四百四十五年 | 平成千四百四十六年 | 平成千四百四十七年 | 平成千四百四十八年 | 平成千四百四十九年 | 平成千四百五十年 | 平成千四百五十一年 | 平成千四百五十二年 | 平成千四百五十三年 | 平成千四百五十四年 | 平成千四百五十五年 | 平成千四百五十六年 | 平成千四百五十七年 | 平成

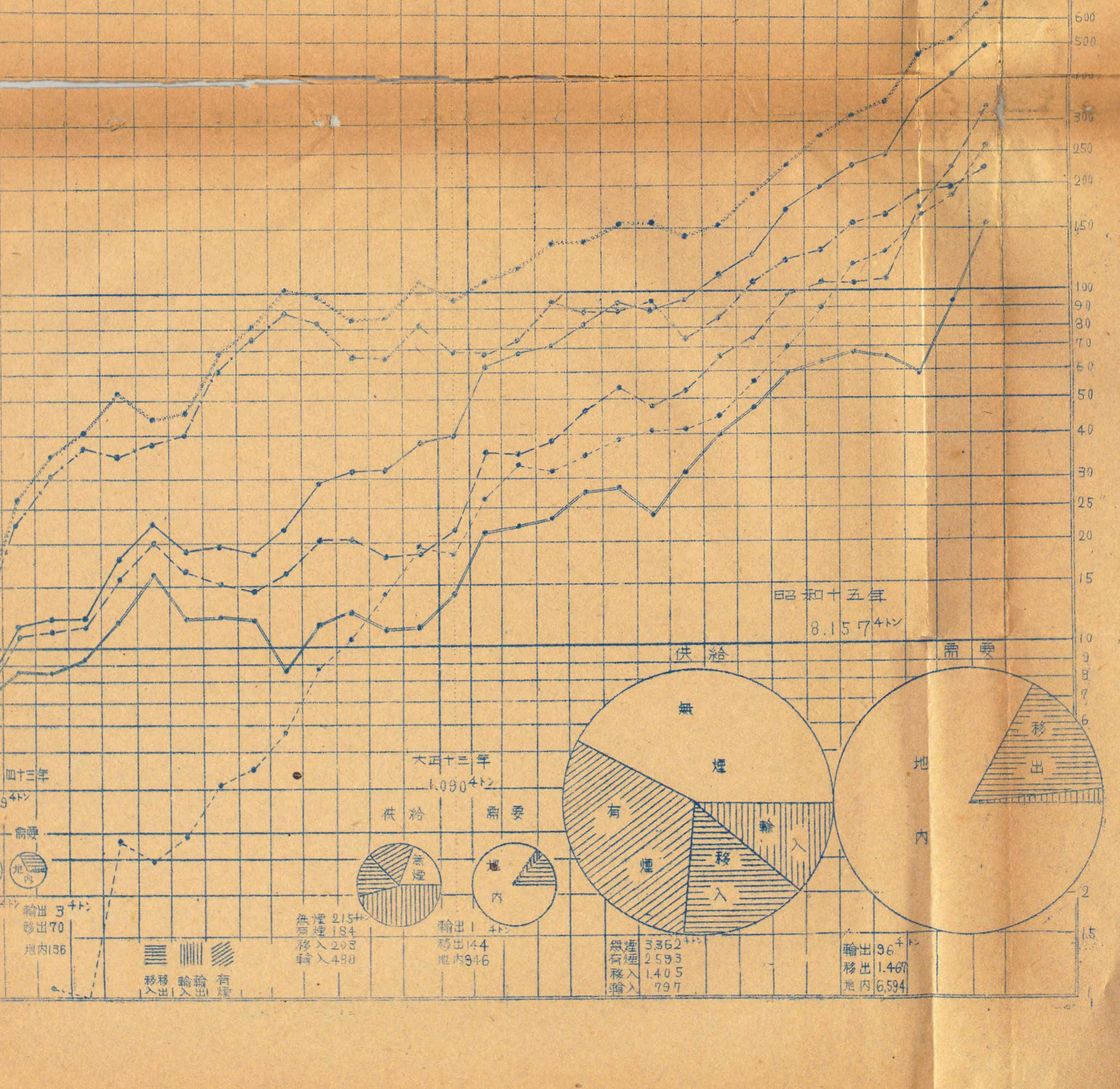
朝鮮石炭事情累年一覧表



朝鮮石炭事情累年一覽表

年	京城物価指数	[illegible]	生産額合計指数	輸移入合計指数	輸移出合計指数	地内消費指数
明治四十四年	46	60	30	34	60	27
大正元年	48	59	32	44	60	37
大正二年	49	60	32	54	64	43
大正三年	45	60	46	52	9	56
大正四年	44	58	57	55	114	46
大正五年	52	57	48	59	85	49
大正六年	70	79	49	91	85	73
大正七年	96	95	47	110	83	37
大正八年	120	131	55	126	60	107
大正九年	124	131	73	113	82	105
大正十年	93	139	78	96	91	88
大正十一年	93	108	78	95	78	91
大正十二年	93	97	35	118	80	114
大正十三年	100	100	100	100	100	100
大正十四年	105	99	156	97	147	114
昭和元年	95	99	171	107	155	127
昭和二年	89	100	178	135	165	148
昭和三年	87	95	204	128	190	151
昭和四年	84	91	235	130	198	163
昭和五年	73	81	221	136	167	167
昭和六年	59	75	234	106	219	153
昭和七年	59	72	276	123	276	164
昭和八年	65	74	327	154	326	201
昭和九年	66	79	423	175	410	243
昭和十年	73	81	518	195	443	286
昭和十一年	78	78	567	224	466	333
昭和十二年	84	84	613	238	453	362
昭和十三年	96	100	725	276	495	481
昭和十四年	111	123	827	286	642	548
昭和十五年			1,002	319	1,084	682





本表ノ上部ハ京城物價指數ト總督府調平均屯當リ炭價ノ大正十三年ヲ一〇〇トシタグラフデ景氣ノ波動ヲ示シ、石炭界ニ對スル經濟ノ循環及ボセル影響ヲ明瞭ナラシメタノデアル。此ノグラフデ注目ヲ要スル點ハ石炭價格指數ノ物價指數ニ對スル「シエーレ」ノ關係デ、大正十四年ニ逆轉ヲ見タ以外ハ炭價指數ガ殆ド上廻ツテ居ル點ト、昭和十、十一、十二年ト景氣ノ上昇初期ニ於テ炭價指數ハ一般物價指數ニ比シテ上昇速度ガ一應停滯シテヰル點ト、更ニ不況ノ底ニ達シタ昭和六、七年ニ於テ一般物價指數ニ對シ非常ニ上廻ツテヰルト云フ事實デアル。此等ノ事實ハ石炭特ニ無煙炭ニ於ケル內地巨大資本ノ統制ヨリ生ズルモノデアル。獨占トハ零細小生產者ニ對スル一般物價指數トノ生產過程ニ於ケル性格ノ差ヲ正ニ證明スルニ足リヤウ。ソレハ獨占的商品ト非獨占的商品トノ價格構造ニ於ケル差異並ニ景氣ニ對スル順應性ノ强度ノ差異ニヨツテ當然齎ラサレタ事實デアル。

次ニ生產額ニ就テ見レバ等比級數的ニ着實ナ增加ノ傾向ヲ辿リ、特ニ有煙炭ニ於テ圓滑ナ發展ヲ示シテヰル。此レハ有煙炭ノ需要ガ地內ニ消

第三表

年次＼種別	砿区数	需要 有煙	需要 移出	推定地内需要（鉄道ヲ含ム）	指数
明治 四三年	27	21.948	69.615	136.057	14
〃 四四年	36	4.4091	84.294	269.830	27
大正 元年	49	10.685	84.248	348.054	37
〃 二年	47	8.705.8	90.667	408.409	43
〃 三年	35	24.630.4	120.101	546.848	56
〃 四年	23	24.5.03	164.062	446.013	46
〃 五年	14	28.954.8	120.962	470.391	49
〃 六年	140	41.13[illegible]0	120.963	689.847	93
〃 七年	590	45.63[illegible]2	116.723	818.142	87
〃 八年	556	57.641	83.505	1.017.226	107
〃 九年	933	88.482	115.498	996364	105
〃 十年	1.081	105.205	129.667	844.753	88
〃 十一年	58	38.480	111.097	863.223	91
〃 十二年	20	179.401	110.948	1.079.539	114
〃 十三年	124	184.238	143.627	945.651	100
〃 十四年	322	262.989	204.452	1082.491	114
昭和 元年	345	331.380	221.986	1201.516	127
〃 二年	142	317.259	236.952	1404948	148
〃 三年	287	350.868	270.614	1424.487	151
〃 四年	149	379.685	285.142	1.546.270	163
〃 五年	158	405.685	239.912	1581.443	167
〃 六年	52	417.578	315.219	1450.811	153
〃 七年	65	452.089	396.776	1522.605	164
〃 八年	145	565.526	463.339	1898.290	201
〃 九年	219	706.272	592.493	2.306.943	243
〃 十年	326	919.888	608.647	2.905.949	286
〃 十一年	224	1.230.142	628.388	3153834	333
〃 十二年	453	1.318.042	592.087	3.427.909	362
〃 十三年	564	1.696.69[illegible]	561.180	4.737.972	481
〃 十四年	819	1.904.891	899.662	5.184.271	548
〃 十五年		2.593.00	1.467.000	6.594.000	682
〃 十六年		[illegible]0	1.220.000		

（註）　指数

第三表

日韓併合以後ニ於ケル石炭礦業發展ノ趨勢一覽表

年次＼種別	礦区数	生産額 有煙(噸)	生産額 無煙(噸)	生産額 合計(噸)	指数	価格(円)	指数	鉱夫 人数	鉱夫 一人当出炭(噸)	供給 輸入	供給 移入	供給 総計(生産額ヲ加)	需要 輸出	需要 移出	需要 推定地内需要(鉄道ヲ含ム)	指数
明治四三年	27	21.95	75.258	98.453	16	398.781	13	1.509	0.23	57.420	72.947	208.820	3.148	69.615	136.057	14
〃 四四年	36	4.407	116.897	121.304	30	539.498	18	1.245	0.29	12.394	223.017	356.715	2.591	84.294	269.830	27
大正元年	49	10.639	117.231	127.870	32	557.802	19	1.898	0.28	49.462	206.868	434.200	1.895	84.248	328.057	37
〃 二年	47	8.704	119.285	127.989	32	570.158	19	2.032	0.30	227.225	145.888	501.104	1.958	90.667	408.479	43
〃 三年	35	22.636	154.626	183.262	46	810.752	27	2.869	0.30	248.676	137.295	539.253	3.044	120.101	546.848	56
〃 四年	42	24.523	204.578	229.121	57	999.946	34	2.480	0.30	247.781	134.446	611.748	993	164.062	446.013	46
〃 五年	14	28.954	161.806	190.760	48	819.221	28	2.455	0.29	277.045	125.226	593.031	1.698	120.962	470.391	49
〃 六年	140	41.137	154.003	195.140	49	1.149.332	39	2.648	0.27	387.749	229.881	812.770	1.960	120.963	689.847	93
〃 七年	590	45.632	141.991	187.623	47	1.315.875	44	3.625	0.20	473.206	277.634	938.463	3.592	116.723	818.147	87
〃 八年	556	57.670	161.834	219.554	55	2.148.831	72	3.033	0.25	557.212	328.306	1.105.052	4.341	83.505	1.017.226	107
〃 九年	933	88.485	202.708	291.193	73	3.917.153	130	5.334	0.24	554.070	268.801	1.114.084	2.222	115.498	996.364	105
〃 十年	1.081	105.204	204.986	310.590	78	3.192.262	108	3.632	0.29	442.994	222.461	976.045	1.625	129.667	844.753	88
〃 十一年	58	138.482	178.848	317.330	79	2.531.436	85	7.361	0.24	477.501	181.379	976.210	1.918	111.977	863.223	91
〃 十二年	70	177.485	182.894	360.379	95	2.750.214	93	5.677	0.25	614.410	199.699	1.192.988	4.301	110.948	1.077.539	114
〃 十三年	124	184.207	215.209	399.416	100	2.961.247	100	6.294	0.28	488.135	202.267	1.089.818	538	143.627	945.651	100
〃 十四年	342	262.992	357.312	620.304	156	4.548.535	154	6.459	0.37	485.629	187.189	1.295.422	8.179	204.452	1.082.491	114
昭和元年	345	331.395	651.501	982.896	171	4.972.699	168	8.410	0.31	464.848	277.438	1.825.182	1.830	221.986	1.201.516	127
〃 二年	142	317.255	392.323	709.598	178	5.286.318	178	7.765	0.28	419.380	313.871	1.642.829	929	236.952	1.404.948	148
〃 三年	237	350.863	464.954	815.817	204	5.769.284	195	11.637	0.28	556.100	332.372	1.698.229	3.188	270.614	1.424.487	151
〃 四年	149	378.657	538.245	937.902	235	6.321.485	213	10.739	0.32	450.023	344.262	1.832.184	995	285.142	1.546.270	163
〃 五年	154	405.661	478.477	884.138	221	5.327.966	180	12.937	—	520.631	417.031	1.821.800	345	239.912	1.581.743	167
〃 六年	52	417.508	518.804	936.382	234	5.190.044	175	11.511	0.30	392.254	437.958	1.766.594	478	315.219	1450.811	153
〃 七年	65	452.032	652.162	1.104.194	276	5.720.119	200	11.564	0.34	387.812	458.474	1.956.480	1.099	396.776	1522.605	164
〃 八年	145	565.517	741.217	1.306.734	327	7.205.406	243	11.691	0.39	495.482	565.359	2.317.555	5.926	463.339	1898.290	201
〃 九年	219	706.277	912.540	1.888.647	423	9.940.566	336	14.747	0.38	626.426	582886	2897.459	18.421	542.493	2.306.943	243
〃 十年	326	919.823	1.079.330	1.999.153	518	11.925.149	403	22.144	0.31	609.489	736.042	3.344.644	30.688	608.447	2.705.949	286
〃 十一年	224	1.230.149	1.057.853	2.288.002	567	13.301.027	451	22.147	0.34	659.094	884.678	3.425.774	45.602	628.338	3.153.834	333
〃 十二年	453	1.318.075	1.113.330	2.431.405	613	15.128.942	511	24.833	0.30	737.790	911.293	4.080.486	60.542	592.037	3.427.909	362
〃 十三年	564	1.696.861	1.723.490	3.419.351	725	25.468.377	833	29.977	0.48	816.057	1.084.103	5.322.511	23.359	561.180	4.737.972	441
〃 十四年	819	1.904.830	2.233.864	4.138.694	827	37806.531	1277	44.137	0.35	926.552	1.241.978	6.113.224	26.291	899.662	5.187.271	548
〃 十五年		2.593.000	3.362.000	5.955.000	1002					797.000	1.405.000	8.157.000	96.000	1.487.000	6.594.000	682
〃 十六年										1.010.000	1.280.000		250.000	1.220.000		

(註) 指数ヲ大正十三年ヲ100トス　十四年迄ハ總督府資料

費ニ對應シテヰルガ地内需要ヲ充足スルニハ到底生産額ガ滿タズ、從ツテ景氣波動ノ影響ニ輸送費ノ「ハンデイキヤツプ」ヲ有スル輸移入炭ノ增減ニヨリ供給量ガ調節セラレ、鮮内產ノ有煙炭ハ不況期ニ於テモ減產ノ必要ガ比較的尠イ爲デアル。一方無煙炭ハ有煙炭トハ正ニ逆デ、内地市場ニ依存スル部分ガ大デアリ、從ツテ無煙炭產出額ノ變動ハ景氣波動ノ影響ヲ其ノ儘反映シ、大正十年、昭和四―五年ノ恐慌ノ影響ヲ多分ニ受ケザルヲ得ナカツタ。從ツテ景氣變動ノ影響ヲ最モ如實ニ反映シテヰルノハ輸移出ノ發展、特ニ移出ノ發展傾向デアル。鮮内需要ノ發展ノ傾向ヲ考察スルナラバ、一般的ニ見テ石炭ノ地内需要ハ當該經濟圈ノ發展ノ段階ニヨツテ制約セラレネバナラナイ。半島ニ於ケル近代的大工業ノ發展ノ具象化コソ石炭地内需要ノ發展ニ外ナラナイ。然ルニ前述セル如ク朝鮮ニ於ケル近代化ノ過程ハ朝鮮自體ノ封建社會内部カラ創造スベキ力ヲ包含セズ、而モ合併後ニ於ケル我國ノ政策ハ朝鮮ノ工業化ヲ寧ロ阻害シ、其ノ市場トシテノ地位ヲ保持セシメントシタ事ハ見逃シ得ナイ事實デアル。斯カル前提ヲ一應頭ニ置キ、次ニ地内消費ノ發展傾向ヲ見レ

バ、大體三ツノ段階ニ區別スル事ガ出來ル。卽チ第一期ハ合併後大正九年ニ至ル日本金融資本ノ確立過程ニ照應スル日本經濟ノ躍騰期、第二期ハ大正九年ヨリ恐慌ヲ轉期トシ昭和六年ノ滿洲事變前迄、第三期ハ滿洲事變發生以後ノ時代デアル。

第一期ハ內地資本ノ急速ナ蓄積ト、之ニ加フルニ併合ニヨル外地的特別利潤確保ノ政治的強力的裏附ヲ得テ、半島ヘノ資本投下ガ急速ニ行ハレ、未開資源ノ開拓ヘト向ツタノデアル。然ルニ大戰ノ終末後間モ無ク世界ヲ襲ツタ恐慌ハ從來ノ恐慌トハ質的ニ差異ヲ有スルモノデアツタ。

自働的均衡恢復力ヲ失ツタ資本主義經濟ハ自カラノ市場ヲ確保スベク必然的ニブロック經濟ヘト發展セネバナラナカツタ。斯カル世界史的段階ヲ反映シテ、日本資本主義モ又大陸特ニ滿鮮市場ノ獨占確保ヲ至上命令トナシタ。斯カル基本的傾向ハ朝鮮地內ノ工業的發展ヲ極力阻止シ、內地企業トノ競爭關係ヲ極力抑止セネバナラナカツタ。此ノ要求ハ工業生產ノ停滯ノ內ニモ表明セラレ、此ノ十一年間ニ地內消費ハ僅カ五〇万竓ニモ滿タヌ增加デアリ、平均增加率ハ四%前後デ前十ケ年ノ二五%前

後「滿洲事變後ノ二五%前後ノ增加率ニ比較スルトキ此ノ期ノ性格ガ明白トナラウ。

次ニ第三期ニ於テハ滿洲事變ヲ契機トシテ朝鮮ガ新タナル樣相ヲ呈シテ前面ニ押シ出サレタノデアル。前述セル如ク此期ニ於ケル工業ノ特殊部門ニ於ケル跛行的發展「卽チ昭和五年ヲ一〇〇トスル時昭和十四年度ニ於テ金屬工業ガ一、五二二、「化學工業ガ八三九ト云フ增加指數ト、同工業生產ノ不均衡（化學工業ガ三一%機械器具工業ノ二%）トニヨッテ指標セラレル所ノ此ノ發展ハ朝鮮ノ機構的近代化ヲ意味スルモノデハナク、「內地經濟ノ補充デアリ、「其ノ一翼トシテノ發展デアル。朝鮮經濟ノ此ノ跛行的發展ノ故ニ、「ソシテ又生產手段ノ中核ヲ形成スル機械器具工業ノ未發展ノ爲ニ朝鮮ニ於ケル工業生產力擴充モ、地下資源ノ開發モ、「日本內地ヨリノ生產手段ノ供給ナクシテ徒ニ過大ナ計畫ヲ作成スルトシテモソレハ「インフレーション」ノ危機ヲ增大スルニ役立ツノミデアリ、「此所ニ朝鮮經濟ノ構造的苦惱ガ存スルノデアル。

第二章　朝鮮炭ノ生産過程

第一節　自然條件

(1)　資源賦存狀態

朝鮮ニ於ケル石炭資源ノ埋藏狀態ヲ地理的分布狀態ニツキ述ベテ見ル事トスル。住々ニシテ埋藏量ノ存在ヲ直チニ石炭生産能力トシテ誤認サレル事ガアルガ資源ノ賦存狀態ハ勿論當該社會ノ生産力ノ發展ノ如何ニ依ツテ可能的存在カラ現實的資源ニ迄具体化サレルノデアツテ朝鮮諸炭田ノ場合ニモ見ラレル如ク高原、三陟、平壤北部等ノ無煙炭田ガ其ノ存在ヲ知ラレ乍ラモ從來開發ニ着手セラレナカツタト云フ事實ノ如キハ正ニ此ノ好例ト云ヒ得ルノデアル。從ツテ埋藏狀態ヲ論ズル爲ニハ輸送ノ可能性勞力結集、資材確保等ノ條件ガ同時ニ論ゼラレネバナラヌ。之等ノ與件ヲ無視スル事ハ今日ノ如キ生産力擴充計畫設定ニアタリ特ニ危險ヲ伴フモノデアル。此ノ意味ニ於テ後述スル勞働力、技術水準、輸送力竝ニ第一章ニ於テ述ベタ朝鮮經濟ノ現段階ニ對スル論述ト併セテ資源賦

存狀態ヲ考察スル事ガ必要デアルガ重復ヲ避ケル爲ニ地理的分布、埋藏量、炭田ノ一般的狀態ニ關シテ論ズルニ止メル事トシタ。

概括的ニ見ルナラバ朝鮮半島ハ其ノ地質上鑛產物等ノ點デ內地トハ非常ニ趣ヲ異ニシテヰル。朝鮮半島ノ大部分ハ內地ニ於テ主トシテ見ラレル古生層、中生層ヨリモ地質時代ノ古イ原生代、始原代ノ結晶片岩、片麻岩等カラ成リ、古生層ハ僅カニ平壤附近ヤ江原道ノ南部ニ存スルニ過ギズ、特ニ之等水成岩地帶ハ內地ガ海生層デアルニ反シ大部分石炭ニ富ム內海或ハ陸成層デアル。中生層ハマダ分布狹ク平壤南部炭田ノ含炭層ハ之ニ屬シテヰル。所謂平壤無煙炭ハ古生層及中生層ニ含マレテヰルモノデアル。

炭田及炭礦ノ位置ヲ附圖トシテ置イタガ一應之ニ說明ヲ加ヘテ見ヨウ

朝鮮ノ炭田ハ無煙ハ平南ニ、有煙無煙炭田ヲ除イテハ小規模ノ炭田ガ散在スルニ過ギナイ。

無煙炭田ニツキ北ヨリ順次ニ概觀スレバ、平安南道ノ北部价川ノ東方ニ平壤北部炭田ガ存スル。此ノ炭田ハ最近德川炭礦ノ大開發計畫ガ行ハ

レツ、アリ、從來ハ龍登（平安北道）、瀧潭、坎北、朝陽、鳳泉等ノ諸炭礦ガアリ最近出炭ヲ開始シタ新倉藍田等ノ出炭ヲ合スレバ昭和十五年度七〇五千噸余ノ出炭ヲナシテヰル。埋藏量ハ從來約五億噸ト云ハレテヰルガ、德川炭礦ノ開發途上發見サレタ新炭層モアリ未ダ正確ナ所ヲ知ル事ハ出來ヌガ、朝鮮ニ於ケル炭田トシテハ其ノ埋藏量ニ於テ最モ多量デアリ、今後ノ開發ガ注目サレテヰル。

次ニ高原炭田ハ咸鏡南道ト平安南道ノ東西二十粁南北五粁デ新設平元線ノ城內驛カラ電谷驛迄ノ四驛ヲ附近ニ有シテヰル。地質ハ二疊石炭紀ニ屬シ現在ノ所推定埋藏量一億一千万噸ト稱セラレ片倉系大東鑛業社ニヨリ大開發ガ進行中デ既ニ昭和十五年度一六七千噸ノ出炭ヲ見テヰル。

平安南部炭田ハ云フ迄モナク朝鮮最古ノ歷史ヲ有スル最モ有名ナ炭田デアリ、從來所謂朝鮮無煙炭ハ殆ンド此ノ炭田ヨリ產出セラレタモノデアッタ。位置ハ平安南道平壤ノ東西ニ連リ、延長約十五里、幅約五里ト云ハレ、地質爽炭層ハ平安系ノ寺洞統ニ屬シ、主ニ砂岩ヨリ成リ、

又圖礫岩、石灰岩ノ薄層ヲ夾ミ、植物化石ヲ包藏シテヰル。埋藏量ハ三億噸ト推定サレ昭和十五年度ノ出炭ハ大約一、二八七千噸ニ達シ、朝鮮無煙炭總出炭ノ三分ノ一强ヲ產出シテ、未ダ王座ヲ確保シテハ居ルガ、次節ニ示ス如ク採炭條件ハ余リ香シカラズ、最近平北、三陟、高原等ノ新炭田ノ開發ト共ニ、日鮮併合以來其ノ盛名ヲ恣ニシタ平壤南部炭田モ老衰期ニ入リツヽアルト云フ感ガ深イ。

三陟炭田ハ江原道三陟郡ニアリ、日本海ニ近接シテ居ル。本炭田ノ地質ハ平壤本溪湖、復州等ト同樣デ古生代下部疊紀ニ屬シテヰル。含炭層ハ大体砂岩、頁岩ノ互層デ此ノ間ニ炭層ガ夾存シテヰル。

埋藏量ハ二億九千八百十万噸ニ達シ、炭質ニ於テモ亦採炭條件ニ於テモ好條件ニ惠マレ、特ニ其ノ輸送ニ便デ冬期ニ於テモ積出シ得ル等將來益々重要視セラルベキ炭田デアル。昭和十五年度六二万噸ノ出炭ヲ行ヒ年々增產ヲ行ヒツヽアル一方三陟炭田ノ西方ニ接スル寧越炭田ハ埋藏量約七千六百万噸ト云ハレ、朝鮮電力社ニ依リ開發セラレ發電用炭ニ供セラレテヰル。

炭　　量　（第四表）

（単位千噸）

炭礦名	確定炭量	推定炭量	未調査	可堀炭量	既堀炭量	摘　要

炭　量　（第四表）

（単位千瓲）

炭礦名	確定炭量	推定炭量	未調査	可採炭量	既採炭量	摘要
亀巌鉱業所	1,076	2,703	−	1,052	(300)	16.8.1 現在
金剛鉱業株式会社和順採鉱所	7,000	20,000	13,000	14,000	(−)	炭鉱提出資料ニヨル
恩城無煙炭礦	2,000	2,500	2,000	2,000	(30)	16.4.7 現在
三陟炭礦	−	122,000	−	72,000	(1182)	朝鮮総督府調（昭15朝鮮
龍登鉱業所	871	7,080	−	523	(892)	炭鉱提出資料ニヨル（16.9脉現在）
大東鉱業株式会社高原鉱業所	1,800	200,000	98,075	100,000	(125)	総督府炭当鉱業所
江西炭鉱	9567	15,946	6,378	7,281	(1,704)	総督府地質調査課編 平南炭田調査報告ニヨル
龍潭炭鉱	8,000	18,000	10,000	7,000	(463)	朝鮮無煙鉱（16.8現在）
江東炭坑	2,554	2,426	−	192	(2,514)	炭鉱提出資料ニヨル（15年末現在）
黒嵓炭坑	1,315	29,480	−	3,667	(579)	〃　〃　〃
元灘炭坑	1,379	2,006	−	1,424	(407)	〃　〃　〃
大寨炭坑	596	1,492	−	612	(1162)	〃　〃　〃
徳山炭坑	586	481	−	986	(480)	〃　〃　〃
三神炭坑	4,931	3,584	−	4,533	(142)	〃　〃　〃
卓柏炭坑	79	423	−	191	(400)	〃　〃　〃
徳川炭坑	−	100,591	−	12,554		〃　〃　〃
新倉炭坑	31,024	384	−	−	(23)	鬼頭調査坑内探炭調査結果ニヨル（15年末現在）

此ノ他慶尚北道聞慶郡ニハ小規模デハアルガ聞慶炭田ガアリ、麻城、聞慶、飛鳳、恩城等ノ諸炭礦ガ存シ、埋蔵量ハ二千七百万瓲ト云ハレル。又全羅南道和順郡ニ於ケル和順炭田モ埋蔵量ハ僅カ九百六十万瓲程度デアルガ、龜巖、和順、東岸、南鮮等ノ諸炭礦ガ結集シ、十五年度一八万瓲余ノ出炭ヲナシ、地理的ニ日本内地ニ近接シ、輸送ノ點デ恵マレテヰル上ニ、労力資源ヲ地元ニ有シ、其ノ現實ニ占ムル地位ハ侮リ難イモノガアル。

以上無煙炭田ヲ個々ニ檢討シタノデアルガ我國ニ移入セラレテヰル各無煙炭礦ノ埋藏量ニ就キ一表トナシ第四表トシテ作成シ參考ニ供スル次第デアル。尚本表ノ數字ハ本文中ノ埋藏量トハ資料ヲ異ニシテヰル點ヲ附言シテ置ク。

次ニ有煙炭田ニ於テハ安州、鳳山、永興迎日ノ小炭田ガ全鮮ニ亘リ散在スルガ、各埋藏量ハ百万、五百万、千四百万、一千万瓲デ總計スルモ僅カニ三千万瓲ニ過ギヌ程度デ、朝鮮ニ於ケル有煙炭資源ノ殆ンド全テガ咸鏡北道ニ集中シ、本道ノミデハ、推定埋藏量ハ大体四億一千万瓲ト稱セラレ、

其ノ後調査ノ進行ニツレテ凡ソ十億噸ニ達スルデアラウト云ハレテヰル。

一口ニ咸北炭田ト云ハレテヰルガ大小多數ノ炭田ガ集合シタモノデアリ各炭田別ニ推定埋藏量ヲ見レバ次ノ如クデアル。

推定埋藏量（咸北各炭田）	
穩城、鍾城炭田	七〇〇萬噸
古乾原炭田	五〇〇〇〃
訓戒炭田	二、〇〇〇〃
慶興炭田	五〇〇〇〃
會寧炭田	一、〇〇〇〃
羅南炭田	一、七五九〃
朱南炭田	一、〇一七〃
大門洞炭田	二三二〃
生氣嶺炭田	二、二四〇〃
明川炭田	五〇〇〇〃
吉州炭田	四〇〇〇〃

總合計	四〇、七〇八、〇〇〇萬噸

咸鏡北道ノ諸炭礦ノ位置ハ地圖ヲ附シテ說明ヲ省略スル。地質又ハ炭層ノ狀態ヲ見ルニ何レモ炭層發達狀態等條件ヲ異ニシテヰルガ、代表的炭礦トシテノ生氣嶺ニツイテ見レバ、劍狀花崗岩ヲ基盤トシテ第三紀層及第四紀層カラ構成サレ、石炭ハ第三紀層ノ一部ニ存スル。鑛區內ニハ階段狀ヲナシテ大斷層ガ三線アリ、咸鏡系斷層一線、鏡城系斷層二線デアル。炭層ハ三炭層群ヨリ成リ、最モ重要ナモノハ下部夾炭層群デ五尺、下、上、三尺等ノ諸層ヲ含ンデヰル。中部炭層群ハ砂岩、頁岩ノ互層ノ中間ニアリ常ニ礫岩ヲ隨伴シ其ノ上下ノ二炭層ガ重要デアル。上部炭層群ハ炭層數ハ十數枚アルガ稼行ニ堪ヘ得ルモノハ一層デ炭質モ他ヨリ劣ツテヰル。其ノ他ノ諸炭礦ハ何レモ多少ノ差異ハアルガ基磐ハ花崗岩デ其上ニ第三紀及第四紀層ガ構成サレ其ノ第三紀層中ニ多クノ夾炭層ヲ含ンデヰル。炭質ハ何レモ褐炭デアルガ、遊仙附近ハ黑炭ニ近イ有煙炭ヲ産出シテヰル。

有煙炭資源ガ斯クノ如ク咸北ニノミ結集シテヰルト云フ地理的隔タリノ事實ハ唯サヘ不足シテヰル朝鮮有煙炭需給ノ空間的適合ヲ往々困難ナラシメル傾向ヲ強メ、石炭ノ圓滑ナ交流ヲ阻害スルコトガ多イ。以下他ノ小炭田ニ就キ概說ヲ加ヘテ見ヨウ。

安州炭田ハ平安南道安州郡ニアリ京義本線万城驛ヨリ西方一帶ニ存スル炭田デ他ノ有煙炭田ト孤立シタ小規模ナ炭田デアルガ、明治鑛業ノ安州炭礦ガ存在シテヰル。地質ハ中生代、水成岩ト花崗片麻岩トヨリ成リ、炭層ハ三層アッテ走向北五〇度西、傾斜南一二度炭厚ハ各々一。二一。五米、〇。六米、二。一米ト云ハレテヰル。他ノ有煙炭山ト離レテ西海岸ニ存シテヰル事ガ此ノ炭田ノ重要性ヲ高メテヰル。埋藏量ハ僅カ百万瓲トモ云ハレテヰルガ十五年度ニハ七万二千瓲程ノ出炭ヲ行ッテヰル。

鳳山炭田ハ黃海道鳳山郡ニアリ京義本線沙里院驛附近ニ存在スル。明治鑛業ニヨリ沙里院炭礦ガ稼行セラレ朝鮮有煙炭礦中長イ間第一位ノ出炭ヲ確保シテ來タガ、昭和十五年度ニハ阿吾地炭礦ニツイデ第二位トナッテ居ル。地質ハ第三紀層ニ屬スル石灰岩デ炭層ハ之ヲ基盤トスル褐炭

層デアル。主要炭層ハ二層デ上層ガ平均一・五米、下層ハ平均二・一米、一般ニ走向ハ略北四十度東、傾斜ハ凡ソ西二〇度デアル。埋藏量ハ五百万噸ト云ハレ、規模ハ小サク將來性ニハ乏シイガ、地理的位置其他ノ點デ現在非常ニ重要ナ役割ヲ果シテヰル。

此ノ他東海岸地方ニハ咸興炭田、或ハ其ノ南方ノ永興炭田ガ咸鏡南道ノ南端近ク位置シテヰル。更ラニ江源道ニハ三陟炭田附近ノ北三炭田ガアリ、慶尚北道ノ内地ニ最モ接近セル慶州炭田、蔚山炭田等ガ存スルガ、何レモ出炭量ハ殆ンド見ルベキモノナク、埋藏量モ慶尚北道ノ三炭田ハ稍見ルベキモノガアルガ他ハ殆ンド問題トスルニ足リナイ。

(2) 炭層ノ狀態

炭層ノ狀態ヲ論ズルニアタッテモ又有煙炭田ト無煙炭田トヲ別個ニ取リ扱ハネバナラヌイ。即チ有煙炭田ハ第三紀層ニ屬スル地層中ニ含マレ、比較的新シク特ニ咸北地方ノ如ク規模ノ大キナ炭田ハ地殻ノ變動ノ影響ガ差程甚シクナイ故ニ炭層ノ整序モ良好デアルガ他ノ小炭田ハ其ノ埋藏

量自体モ少ナク、炭田狭少ディヅレモ有煙炭需要ノ擴大ニ追ハレテ條件ノ惡イ處モ無理ニ採炭スルガ如キ場合モ多イ。一方無煙炭ニ於ケル採炭條件ハ非常ニ複雑ナモノデアルガ内地トノ關聯多キ點カラモ無煙炭ニツイテハ少シク詳述ヲ試ミル事トスル。

朝鮮ニ於ケル無煙炭田ハ原生代以前ノ非常ニ古イ時代ノ地層ニ包含セラレ炭量ト云ヒ炭層ノ形狀トカガ推定シ得ル程ニ地殻ノ變動ノ影響ヲ受ケ、炭層モ揉ミクダカレテ粉炭トナリ、押上、押下ケ等ノ變動ニヨリ層狀ガクヅレテ大ツタリ細ツタリボケツト狀ニ溜ツタリ、炭層ガ切レタリスル事ガ多ク、事業計畫ヲ立テルニモ探礦ヲナスニモ非常ナ困難ト危險ヲ伴フモノデアル。此ノ樣ナ變動ハ勿論各炭田ニヨリ其ノ程度ヲ異ニシ平南炭田ノ如キハ最モ甚シク、北部炭田ハ此レニ比スレバヤヽ變動狀態ガ少ナク、三洲ノ如キハ最モ層狀ガ安定シテヰル。

程度ノ差コソアレカヽルボケツト狀ヲナス事ハ無煙炭ノ性格ニ深キ暗影ヲ投ジ、根本的ナ規定ヲ無煙炭ニ與ヘテヰル。稼行ニ對シ如何ニカヽル性格ガ作用スルカヲ檢討シテ見ヨウ。

自然的條件一覽表（第五表）

要項 ＼ 坑名又ハ炭層名	傾斜	炭丈	夾雑物	上下盤	ポンプ設備	ガス炭塵ノ危険	摘要
				上下盤崩		ガス炭塵又	

東 入 従 カ 此 ア ト 合 此 高 ラ 遺 ヲ ノ

自然的條件一覽表（第五表）

要項 ＼ 坑名	傾斜	炭丈	夾雜物	上下盤	ポンプ設備	ガス炭塵ノ危險	摘要
鬼嶽鉱業所 一坑道	水平坑	3.0m		上下盤共ニ頁岩		ガス炭塵共ニナシ	
〃 二〃	〃	3.0m				〃	
〃 五〃	〃	2.0m				〃	
〃 大〃	〃	1.2m				〃	
〃 第一本卸坑	22°				扇部排水用 7.5HP タービン	〃	第一本坑坑目下堀進中
〃 上層炭		平均2.5m	砂質夾石			〃	
現城無煙炭鉱 上層	60°～70° 70°～82°	3.85尺	ナシ	炭質頁岩又ハ砂岩	ナシ	ナシ	動力ノ設備ナク水準以上ノミ採掘炭層厚サハ平均厚トス、波狀ニシテ厚キ箇所3.0尺以上ニ達セル箇所アリ
〃 中〃	〃	5.08	〃	〃	〃	〃	
〃 下〃	〃	1.54	〃	〃	〃	〃	
和順採鉱所 北坑	18°	平均層厚25尺	頁岩、砂岩	砂岩	10HP1 2HP1	ナシ	
〃 西坑	25°	〃 〃	〃	〃	15HP1 10HP1 2HP1	〃	
〃 東岩坑	20°	〃 〃	〃	〃	7½HP1	〃	
三陸炭鉱 長省	55°	3m	アリ	頁岩、砂岩	ナシ	ナシ	
〃 黒川	45°	5m	〃	〃	〃	〃	
〃 鉄岩	65°	8m	〃	〃	アリ	〃	
〃 興田	70°	2.5m	〃	〃	〃	〃	
龍登鉱業所 東坑	40°～45°		ナシ	砂岩	ナシ	ナシ	
〃 一坑	50°～55°		〃	〃	〃	〃	
〃 二坑	50°		〃	〃	〃	〃	
〃 三坑	25°～30°		〃	〃	20HP1S	〃	
高原鉱業所 10坑	25°	3.0m	ナシ	砂岩、頁岩	ナシ	ナシ	
〃 30〃	30°	4.0m	〃	〃	〃	〃	
〃 50〃	35°	4.0m	〃	〃	〃	〃	
〃 100〃	30°	4.5m	〃	〃	〃	〃	
〃 60〃	30°	4.0m	〃	〃	〃	〃	
風泉無煙炭鉱 前層	20°～80°	0.6m	コールセール	砂岩	ナシ	ナシ	
〃 本層	〃	5m～10m	〃	〃	〃	〃	
〃 下層	〃	5m～50m	〃	〃	〃	〃	

自然的條件一覧表

炭砿名	坑又ハ層名	傾斜	炭丈	夾雑物	上下盤	ポンプ設備	ガス炭塵ノ危険	摘要
江	A本層	30°	5尺	頁岩	頁岩,石灰岩		ナシ	

來 入 従 カ 此 ア 」 合 此 高 ラ 遺 ヲ ノ

自然的條件一覧表

岩盤名	要項 / 坑マハ層名	傾斜	炭丈	夾雑物	上下盤	ポンプ設備	ガス炭塵ノ危険	摘要
江西炭鉱	A本層	30°	5m	頁岩	頁岩、石灰岩		ナシ	
	A下〃	45°	3m	〃	〃		〃	
	B本〃	35°	3m	〃	〃		〃	
	B下〃	35°	2m	〃	〃		〃	
龍潭炭鉱	東坑	9°	1m～20m	石灰炭	頁岩、砂岩		ナシ	
	南坑	30°	1m～20m	〃	〃		〃	
	北坑	35°	20m	〃	〃		〃	
	藍田坑			〃	〃		〃	
江東炭坑	新斜坑及第三斜坑	30°～45°	平均3m	砂質頁岩炭質〃	上砂岩頁岩下砂質〃	別記ノ通リ	ナシ	臥龍里坑ポンプ設備次ノ如シ タービン50HP 3台 ウヰルHP台 〃 40〃 2〃 〃 3〃 1〃 〃 35〃 1〃 〃 20〃 1〃 〃 15〃 1〃 〃 3〃 1〃 〃 20〃 1〃 (探炭坑) スリスロー35〃 1〃
	探炭坑	45°～50°	2m	〃	〃〃	ナシ	〃	
	臥龍里坑	60°～70°	2m及至10m	不規則ナル玉石、頁岩	両盤ト〃頁岩	20HP 2台 30HP 1台	〃	
	露天坑	50°	1m～5m	〃	〃	30HP 1台	〃	
	明義里坑	本層 70° 上〃 30°	1m～5m 1m～10m	〃	〃	25HP 1台 20HP 3台 20〃 3台 30〃 1〃 25〃 1〃	〃	
黒嶺炭坑	黒嶺坑	35°	5m	20%	脆弱	ナシ	ナシ	
	路積坑	55°	6m	25%	強固	〃	〃	
	石廩坑	30°	3m	20%	脆弱	〃	〃	
	源孝坑	45°	5m	20%	強固	〃	〃	
元灘炭坑	梅堂坑層	17°～40°	1m	頁岩	砂岩	2台	微量ガスアリ	
	鳳凰坑層	17°～30°	1m	〃	〃	1台	ナシ	他ニ八層アルモ未着手
	南京坑層	23°～25°	3m	〃	〃	3台	微量ガスアリ	
大、宝炭坑	一坑	20°	88m	ナシ	上 上層頁岩 下 下層砂質頁岩	20HP 30HP 40HP 10HP	ナシ	ポンプハスパハスリスロー他ハタービントス。
	二坑	25°	80m	〃	上 砂岩 下 頁岩	20HP	〃	
	三坑	21°	1.24m	〃	上下 〃	60HP 10HP	〃	二坑及五坑ハ目下中止(三坑ハ小平坑道ニ相対中)
	西斜坑	20°	1.50m	〃	上 頁岩 下 〃	25HP 2HP	〃	
	四坑	36°	1.93m	〃	上 〃 下 〃	20HP 2HP	〃	
	五坑	30°	0.60m	〃	上 〃 下 〃	ナシ	〃	
	六坑	21°	0.75m	〃	上 〃 下 〃	30HP	〃	
	七坑	25°	1.09m	〃	上 頁岩砂岩 下 頁岩	30HP 2HP 1HP	〃	

自然的條件一覽表

炭砿名	坑名又ハ層名 ＼ 要項	傾斜	炭丈	夾雜物	上下盤	ポンプ設備	ガス炭塵ノ危険	摘要
德山炭	德山坑	20°	6.0m	硬アリ	上砂質頁岩 下 〃	12台	ナシ	
	新街坑	20°	3.0m	〃	上 〃 下 〃	3 〃	〃	
	松街坑	20°	3.0m	〃	上砂岩 下砂質頁岩	2 〃	〃	

來入從カ此ア上台此高ラ遺ヲノ

自然的條件一覽表

炭礦名	坑名	要素	傾斜	炭厚	夾雜物	上下盤	ポンプ設備	ガス炭塵ノ危険	摘要
德山炭坑	德山坑		20°	6.0m	硬アリ	上砂質頁岩 下〃	12台	ナシ	
	新德坑		20°	3.0m	〃	上〃 下〃	3〃	〃	
	松德坑		20°	3.0m	〃	上砂岩 下砂質頁岩	2〃	〃	
			20°	4.0m	〃	上〃 下〃	1〃	〃	
三神炭坑			10°	ポケット狀ヲ形成ス	中首ニハ軟質硬ヲ狹在シ下層ニハ玉石ヲ混有ス	上盤ノ軟質ニシテ下盤ハ砂質ノ硬ヌハ砂岩	各坑共ニタービンヌハデートポンプヲ設置シ直接又ハ二段ニテ坑外ニ排水ス	メタン反斯アリ	平安系ノ二疊紀石岩ニヨル寺洞統下部ノ中層及下層デアル
炭坑	頁岩坑		40°	0.80m	砂岩又ハ頁岩	主トシテ砂岩	完備	沼氣相當危険	
德川炭坑	北坑		20°	6.m	岩質頁岩	頁岩又ハ砂岩	ナシ	ナシ	
	南坑		20°	4.m	〃	〃	〃	〃	
	中央坑		45°	4.m	〃	〃	〃	〃	
新倉炭坑	一坑		18°	6m	頁岩	砂質岩	75HP10吋1台	ナシ	
	二坑		20°	6m	〃	〃	5HP5吋1台	〃	
	三坑		16°	10m	頁岩、燒岩	〃	40HP800ヴォルテ1台 75HP10吋1台	〃	
	四坑		15°	15m	〃	〃	40HP800ヴォルテ2台 5HP5吋2台	〃	
朝陽炭坑	中央坑	平均	30°	堀進中ノモノ平均厚サ2米優良無煙炭ヲ米	ナシ	上頁岩 下砂質頁岩	タービンポンプ1HP1.2HPプランジャポンプ	ナシ	ポンプ設備ハ昭和14年6月現在ヲ示ス
	東坑	〃	〃	全上	〃	全上 全上	全上 全上	〃	

坑道掘進ノ場合ノ如キ炭層ガ不安定ナタメ此レヲ目標トスル事ガ出來ズ基磐ヲ押ヘ、之ヲ基準トシテ片磐坑道ヲトリ、之レヨリ竪入坑道ヲ入レ、炭層ヲモトメルノデアルガ、不幸ニシテ着炭セヌ場合モ往々アリ、從ツテ相當ノ坑道掘進費ヲ無駄ニスル事ガ多イ。然モソレノミナラズ、カカル地層ノ變動多キ所デハ當然坑道仕繰ニモ費用ガ掛ルバカリデナク、此レガ結局ニ於テ鋼鮮炭ノ價格構成因子トシテ組ミ込マレテシマフノデアル。

次ニ採炭ノ場合此ノボケツト狀炭層ノ及ボス影響ヲ見ルト「ボケツト」ガ發達シテヰル處デハ數十米ノ厚層ニナッテ居リ、此レヲ採掘スル場合ニハ下部ヨリ採炭シ、其ノ掘跡ヲ土石等ニヨリ充塡シツヽ上部ニ向ヒ此ノ方法ヲ繰返シテ全部ヲ採炭スル方式ガ行ハレ、長壁法ノ如キ能率カ高ク体系的ナ進歩ヲシタ採炭方式ガ行ハレ得ヌト云フ事ハ炭層ノ狀態カラ當然ノ結果デアル。此ノ樣ナ方法ハ非常ニ手間ガ掛リ、途中デ崩壞ニ遭ツテ採炭ヲ停止セネバナラヌ樣ナ事ガアッテ、此ノ點ハ屯當リ採炭費ヲ增大セシメルガ、一度ビケツトニ當レバ既設坑道、坑內諸設備ヲ多量ノ

採炭ニ活用シ得ルト云フ利點ガアリ、生産費ニ對シテ相殺ノ關係ヲモツ事ニナル。

坑内水ニツイテ見レバ、一般ニ炭礦自体比較的淺ク水ハ少ナイノデアルガ、無煙炭層ニ付キモノ、大石灰岩ニ斷層等デ當ルト不時ノ出水ニ遭遇スル事ガアリ、水準以下ニ搦下ゲル場合ニハ强力ナ「ポンプ」ヲ用意セネバナラナイ。

以上非常ニ大雜把デハアルガ、無煙炭礦ノ採炭條件ニ於ケル特異性ヲ述ベタノデアルガ、内地ニ移入セラレテヰル無煙諸炭礦ノ採炭諸條件ニ付テハ之ヲ一覽表（第五表）トシテ一括シタ。本表ニ於テ炭丈ガ表示セラレテヰルガ、事實上ボケツト狀炭層ヲナシテヰル朝鮮無煙炭礦ニ取ツテハ常ニ不安定デアル事ヲ念頭ニ置イテ考察スル必要ガアル。又ポンプ設備ノ項目ハ坑内不事ノ出水ノ危險ニ對スル備ヘヲ示シタモノデアル事ハ勿論デアルガ、實際ノ坑内水ノ狀態ヲ知リ得ベクモナク、此レニヨリ代替セシメタノデアル。

朝鮮炭ガ如何ナル炭質ヲ有スルカト云フ事ハ其ノ商品トシテノ流通過程ヲ決定的ニ規制スル。例ヘバ褐炭原料トシテアテガハレル無煙炭ニツイテ見テモ、其ノ熱量ノ大ナルコトヨリモ、寧ロ其ノ製品ガ煉炭ノ規格ニ合致シ、火着キモ良ク、灰分モ少ナク、其ノ作成サレタ煉炭ノ容積モ大体炭ノ賣買單位ハ個數（一定容積ナルヲモッテ）トナルガ如キ事ガ必要デアル。從ッテ煉炭原料トシテ無煙炭ニッイテモ炭ノ適性等級ハ一般ノ等級序列トハ全ク無關係ナル場合モ往々アリ得ルノデアル。

朝鮮炭ハ已記ノ如ク第三系灰炭累層ニ屬スル物ハ有煙不粘結炭デ、炭質ハ一般ニ發熱量四千一六千カロリー程度、ソノ中五千二百一五千三百カロリートト云フ所ガ最モ多ク、灰分ハ六%一二十數%程度、品質ハ常磐炭ノ二三級（改訂）所ト大体類似シタ褐炭デアル。ソレ故嘗ニ浦ノ製鐵所其ノ他高級炭、粘結炭ヲ必要トスル場合ハ半島外カラ取得セネバナラナイ。

然シ朝鮮褐炭ハ煤煙ガ少ナク都市燃料トシテハ最適デ又液化原料ニモ適當スルタメ、阿吾地ノ直接水素添加法ニヨル人造石油工場、永安ノ低

第六表 分析表（1）

炭種名	産地名	水分	揮発分	固定炭素	灰分	硫黄	骸炭質	発熱量	比重
	吉川	22.16	33.75	27.89	16.20	2.05	不粘結	4041	1.42

カロ 化度 、火 示リ チセ デハ ベ大 險デ レル 記シ

第六表　分析表（1）

炭種名	産地名	水分	揮発分	固定炭素	灰分	硫黄	膠質	発熱量	比重
有煙炭	吉川	22.16	33.75	27.89	16.20	2.05	不粘結	4041	1.42
	古站	24.09	32.06	29.78	14.07	0.77	不粘結	4.377	1.39
	昭和	10.43	52.25	27.54	9.78	0.89	不粘結	6,473	1.27
	生気嶺	9.59	48.99	34.94	6.48	0.28	不粘結	6.113	1.30
	雞林	13.84	37.64	40.68	7.84	1.28	不粘結	6.101	1.29
	訓戎	17.73	35.21	38.34	8.75	1.36	不粘結	5491	1.32
	古乾泉	15.17	33.76	44.98	6.09	0.31	不粘結	5.949	1.34
	阿吾地	15.75	38.40	35.66	10.19	0.57		5,508	1.34
	雞南	25.40	34.61	32.09	7.90	0.53	不粘結	4.630	1.33
	沙里院	14.92	35.12	42.91	7.05			5,779	
	安州	14.92	38.15	36.34	10.59	0.20		5,627	1.40
無煙炭	平南北部	4.47	3.08	78.53	8.92	0.65	不粘結	7,202	1.70
	平南北部	4.86	5.48	76.66	13.00	0.40		6.800	1.80
	江界	2.05	6.47	80.62	10.86	0.39	不粘結	6.915	1.40
	文川	3.90	4.66	79.21	12.23	0.40	不粘結	6,500	1.74
	高原	4.52	5.41	82.03	8.04	0.63	不粘結	7,123	1.76
	和順	7.37	3.57	76.22	12.84	0.33	不粘結	5,877	1.95
	三防	3.98	10.57	78.74	6.71	0.23	不粘結	7,523	1.70
	寧越	3.15	3.32	82.47	11.06	0.59	不粘結	6,969	1.69

朝鮮總督府燃料選鑛研究所調

温乾餾工場ニ於テ最近大量ニ使用セラレテヰル。

無煙炭ハ平安系炭層ヨリ産出セラレテヰルガ、品質ハ大約六千カロリー以上、七一二五%ノ灰分ヲ有シ、内地ニハ余リ産出セラレヌ炭化度ノ高イ無煙炭デアル。發熱量ハ高イノデアルガ、揮發分ガ少イタメ、火着ガ惡ク或ハ炎ガ短カイ等ノタメ一般ノ工場ボイラーニ用ヒルニハ余リ適當セズ、家庭用煉炭原料トシテ最モ妥當シ、又時ニ良質ノ塊狀ヲナセルモノハカーバイド用其ノ他ノ化學工業ニ於テモ使用セラレ、最近デハ製鐵還元用トシテ金屬精煉ニ用ヒラレル。

各炭田別ニ朝鮮總督府燃料選鑛研究所調ノ分析表ニヨリ之ヲ見レバ大体第六表ノ如クデアル。

然シ此ノ場合一炭田ヲ一本ノ分析表デ代表セシメル事ハ非常ニ危險デアル事ハ勿論デアルガ參考マデニ掲ゲテ置イタ。

本表ノ補足トシテ、業者ノ報告ノマヽ、デアルガ、内地ニ移入セラレル無煙炭ニツイテ第七表トシテ表示シテ置イタ。ナホ骸炭質ニツイテ記シテナイガ、全テ不粘結炭デアル事ハ云フマデモナイ。

第七表

炭質分析表 (2)

炭鉱名	品名又ハ番名	水分	揮発分	固定炭素	灰分	発熱量
亀鹿鉱業㈱	一坑切込	8.15	4.00	75.55	12.30	6,424
	〃	8.40	4.40	74.10	13.10	6,992

アラビア検シナルヨルロシ

第七表

炭質分析表 (2)

炭鉱名	品名又ハ層名	水分	揮発分	固定炭素	灰分	発熱量
亀巌鉱業所	一坑切込	8.15	4.00	75.55	12.30	6,424
〃	二坑 〃	8.00	4.40	69.10	18.50	5,992
〃	五坑 〃	9.20	5.50	69.40	15.90	6,305
〃	六坑 〃	5.75	3.90	67.50	12.00	6,268
全南鉱業株式会社和順採鉱所	東岩炭	6.04	3.34	78.25	12.39	6,400
〃	北西炭	6.40	4.90	72.10	12.00	6,000
思城無煙炭鉱	切込炭	3.28	1.38	74.1	20.00	7,346
三陟炭鉱	塊粉切込	4.39	4.83	82.24	8.55	7,152
〃	〃	3.47	1.85	79.25	15.43	6,582
〃	〃	3.34	3.44	71.56	21.66	6,050
〃	〃	3.01	3.61	68.97	24.41	5,958
龍登鉱業所	大塊	0.90	10.10	79.90	9.10	6,712
〃	中塊	0.10	11.90	75.90	12.10	6,376
〃	粉	2.20	9.80	77.10	9.10	6,476
大東鉱業株式会社嘉義鉱業所	A特粉	2.60	7.45	82.13	9.12	6,726
〃	〃 粉	2.20	5.77	76.23	11.62	6,140
〃	〃 小塊	2.79	6.14	79.33	11.13	6,853
〃	〃 中塊	3.52	5.25	77.93	12.00	6,720
〃	一次塊	2.00	8.00	84.00	9.00	7,056
鳳泉無煙炭鉱株式会社	鳳泉炭	4.63	4.98	80.13	10.26	6,316
〃	瓦洞炭	3.85	5.26	78.23	12.66	6,142
〃	茶洞炭	5.20	5.55	80.66	8.59	6,520
〃	藍田炭	6.29	4.71	77.13	11.27	6,440
辺面炭鉱	A本層	2.17	3.77	83.95	10.11	6,981
〃	〃下層	2.71	3.77	78.71	14.81	6,722
〃	C本層	2.53	4.11	82.01	11.35	6,898
〃	B 〃	2.61	4.10	78.14	15.15	6,659
〃	〃下層	2.91	4.05	79.31	15.75	6,631
龍潭炭鉱	龍潭炭	4.00	4.52	75.72	15.76	6,070

炭　　質

炭　砿　名	品名又ハ層名	水　分	揮発分	固定炭素	灰　分	発熱量
江東炭坑	江東一種粉	3.02	2.94	82.59	11.45	7016
〃	〃 二種粉	3.68	2.76	78.85	13.71	6653
〃	〃 三種粉	1.98	6.14	73.20	18.68	6325

アラビア検シナル要ルニシ

炭　　層

2

炭　砿　名	品名又ハ層名	水　分	揮発分	固定炭素	灰　分	発熱量
江東炭坑	江東一種粉	3.02	2.94	82.59	11.45	7016
〃	〃 二種粉	3.68	3.76	78.85	13.71	6653
〃	〃 三種粉	1.98	6.14	73.20	18.68	6325
恵嶺炭坑	三登二種粉	4.09	3.44	81.17	11.30	6642
元難炭坑	平壌一種粉	2.80	5.47	80.38	11.35	7052
〃	〃 二種粉	3.36	4.64	76.98	15.02	6651
大宝炭坑	大宝一種粉	4.45	2.37	78.47	9.71	7084
	〃 二種粉	4.02	3.68	79.90	12.40	6607
徳山炭坑	三登二種粉	2.68	5.34	78.67	13.31	6698
三神炭坑	平壌一種粉	1.56	5.40	82.04	11.04	7202
〃	〃 二種粉	2.40	5.65	75.40	16.55	6711
貞柏炭坑	貞柏一種粉	1.47	8.70	78.84	10.99	7381
徳川炭坑						
新倉炭坑	新倉一種粉塊	1.66	7.02	84.68	6.64	7057
朝陽炭坑					16.00	6610

而シテ朝鮮無煙炭ノ最大ノソシテ最モ適格セル需要タル煉炭原料トシテノ品質ニ付キ更ニ分析スルヲ要スル。

石炭品位取締規則第一條第一項ニ依ル石炭規格ニ於テハ燃料比四・〇以上ノモノヲ無煙炭トシ同樣四。〇以上デ火山岩ノ影響ニヨリ變質セルモノヲ煽石ト定メテヰル、シカシ如何ナル無煙炭ヲ採ツテモ各種ノ需要例ヘバ煉炭、製鐵還元用、カーバイト原料等ノドレニモスベテ適格スルト云フノデハナイ。各々微妙ナ條件ノ滿タサレル事ヲ必要トシ、僅カナ炭質ノ不適合ガ生産ノ圓滑性ヲ阻害シ、或ハ商品ノ使用價値ヲ低下セシメル事ガ往々ニシテ生ズルモノデアツテ、此ノ適格性ノ問題ヲ少シク檢討シテ見ル事トシヨウ。

元來有煙無煙ノ別ハ石炭生成過程ニ於ケル石炭化ノ高低ニ依リ決セラレルモノデアリ、商工省地質調査所炭種分類標準ニヨレバ次ノ如クデアル。

名稱	燃料比	固定炭素 %	揮發分 %	瀝青性狀
無煙炭	一二以上	九二三以上	三―七	不粘結

半無煙炭	一二―一七	九二・三―八七・五	九―一三	不粘結
半瀝青炭	七―四	八七・五―七五	一四―一九	粘結又ハ微弱
高度瀝青炭	四―一・八	七五―六五・七	二七―三五	粘結
低度瀝青炭	一八―一・〇	六五・七―五〇	三二―五二	粘結又ハ微弱
黒炭褐炭	一・〇以下	五〇以下	五〇以上	不粘結

サテ煉炭原料トシテノ無煙炭ニツキ見レバ、使用者ガ最モ良ク經驗スル如ク、決定的條件ハカクリーノ點ヨリモムシロ着火溫度ノ高低ト灰分ノ多少デアル。更ニ硫黄分ノ多少モ非常ニ重要デ燃燒時ニ亞硫酸、無水硫酸、硫化水素トシテ發散スル所謂燃燒性硫黄ト發散セザル固定硫黄トガ存スルガ、此ノ兩者ノ比率ヲ考慮セネバ單ナル全硫黄分ノミデ適格性ヲ云々シ得ヌ事ニ注意セネバナラヌ。即チ燃燒性硫黄分ノ多イ時ハ燃燒器材ヲ腐朽セシメルノミナラズ、有毒ガスヲ發散スルノデ特ニ家庭燃料トシテハサケネバナラナイ。

内地ニ於テ煉炭原料トシテ用ヒラレテヰル炭種別灰分、着火溫度ヲ見レバ次ノ如クデアル。

序列	灰分		着火温度	
	炭名	%	炭名	C
1	新倉	9.72	牛心台	365
2	德山	12.33	山陽特	370
3	黑嶺	13.85	三神洞	380
4	龍登	14.82	裕新	385
5	江東2	15.33	長城一坑二層	390
6	三神洞	16.00	江西A	400
7	牛心台	16.21	長城二坑三層	400
8	鳳泉	16.62	江西B	400
9	江東3	16.72	臨楡	405
10	朝陽	18.44	三陟	405
11	龍潭	18.50	江東2	410
12	江西A	19.00	德山	410
13	三陟	22.03	江東3	410
14	江西B	22.53	朝陽	410
15	長城一坑二層	30.53	黑嶺	415
16	山陽特	31.72	龍登	420
17	長城三坑三層	31.90	鳳泉	420
18	臨楡	34.72	龍潭	420
19	裕新	42.72	新倉	440

此ノ様ナ煉炭原料トシテ要求セラレル種々特有ノ條件ヲ如何ニ称量スルカニツキ見ルニ煉炭原料用「無煙炭粉炭標準規格」トシテ品川燃料社山田氏ノ作成サレタ次表ヘ煉炭產業ガ如何ナル石炭ヲ必要トシテキルカ、換言スレバ煉炭原料適格炭決定ノ指標トシテ非常ニ參考ニナル。

種別	規格 着火温度(℃)	規格 灰分(%)	摘要 規格	豆炭 主力炭	豆炭 補助炭	煉炭 主力炭	煉炭 補助炭
特1號	370	9.0	着炭温度(℃)	390以下	410以下	410以下	410～440
特2號	375	10.5					
特3號	380	12.0	灰分(%)	16以下	20以下	19以下	20～42
第1號	385	14.0					
第2號	390	17.0					
第3號	395	20.0					
第4號	400	23.0					
第5號	405	26.0					
第6號	410	29.0					
第7號	415	32.0					
第8號	420	35.0					
等外1號	430						
等外2號	440						

孔明煉炭原料トシテハ着火温度440℃ナラバ灰分10以下。着火温度340℃ナラバ灰分約42%迄。着火温度360℃ナラバ灰分約35%迄補助炭タルコトヲ得

本表ニハ示サレテヰナイガ、此レ以外ニ實際上ノ問題トシテ重要ナ點ハ石炭ノ結晶狀態ニ應ジテ混合スベキ割合ガアルコト及ビ使用トシテハ粗巨使用限度約二割迄ト云ハレ、鱗狀、土狀ノ割合ハ自由デアルガ、煉炭用トシテハ、煉炭ガ容積ニヨル單位個數デ賣買セラレル爲、鱗狀無煙炭ヲ使用スル事ニヨリ容積ヲ大ナラシムル必要ガアル。此ノ配合割合ヲ公式ニヨリ示セバ次ノ如クデアル。

$$\text{配合率} = \frac{\text{比容積}}{\text{比重}}$$

カクノ如ク其ノ配合率ノ差異、且ツ要燃料タル煉炭ノ生產ハ停滯ヲ來ス事ニモナルノデアッテ、一口ニ朝鮮無煙ト呼バレテヰル多數ノ炭種ヲ合目的々ニ配給スル事ハ困難デハアルガ要ス事ト云ハネバナラヌ。

尙ホ朝鮮無煙ノ炭質自體ガ一定時ノ分析成績ニヨッテ決セラレズ常ニ變動シテヰルト云フ點モ注目ニ値ヒスル。ソレハ炭層ノ條件ニツイテ述ベタ如ク、朝鮮ノ諸炭田ハ地殼ノ變動ヲ受ケ、小規模ナ炭田ニアリ勝ナ斷層ヤ、摺曲ガ多ク、炭層ガ不整序デ炭質モ此レニ對應シテ變化シ、稼

行ノ進行ニツレテ切リツヽアル炭層ニヨリ又其ノ位置ヤ深サニヨリ分析成績ヲ異ニスルノデアル。而モソレノミナラズ鞏鮮諸炭礦ノ技術水準ノ低位ハ選炭設備ノ不整備ト云フ點ニモ喪ハレテヰル事ハ否メナイ。タヾ注意セネバナラヌ事ハ塊粉ノ篩分ケニ際シテ粉分ガ篩ノ目ニ附着シテ選別ヲ困難ナラシメルノミナラズ、此レヲ水洗スルニハ余リニ微細デ、灰分トノ比重ノ差ガ近接シテヰル爲ニ普通ノ方法デハ非常ナル困難ヲ伴ヒ加フルニ沈澱粉ニモ見ラレル如ク一度濡レルト水切ガ悪イタメ輸送ノ際シカヽル障害ハムシロ絶對的ナモ撿ニ支障ヲ來ス事ガ多イノデアル。然ノトハ云ヒ難クカヽル炭礦ニ照應シタ選炭技術ノ發展ガ今後ナサレルナラバ、分析成績ノ向上モ可能デアルト云ヒ得ルノデアル。此ノ點ハ配給計畫ヲナス場合充分考慮セラレネバナルマイ。

第二節　最近ノ出炭狀況ト會社經營狀態

朝鮮ニ於ケル最近ノ出炭狀態ハ最近數ケ年間ニ驚クベキ飛躍ヲ示シツヽアル。朝鮮地內需要ノ擴大ノ一方內地市場ノ好調ニヨリ新炭礦ガ次々ニ創出サレ、他方從來ヨリ出炭ヲ行ヒ來ツタ諸炭礦モ規模ヲ擴大シ、出炭量モ著シク增加シタノデアル。然シ極ク最近ニ於ケル出炭ノ狀態ヲ見ルニ、有煙炭ト無煙炭トデハ非常ニ性格ヲ異ニシ、有煙炭ハ地內需要ガ益々增加スルニモカヽワラズ增產ノ成績ハ充分ニ上ラズ、十六年四月ー八月ノ成績ヲ對前年同期間中ニ比較スルモ僅カ〇・四%（四千噸）ノ增加ニ過ギズ、最近ノ八月中ノ如キハ前年同月ニ比シ四・九%（一万屯）ノ減產トスラナリ、有煙炭出炭能力ノ限界ヲ示シツヽアルモノノ如クデアル。此ノ原因トナツテヰル點ハ第一ニ、勞働力ガ不足シ、特ニ採炭夫、支柱夫等坑內熟練鑛夫ガ不足シテヰル事デマカセズ、而シテ募集ノ成績モ思フニ任セズ、其上募集許可ガ遲延シテヰル。第二ニ、資材ガ不足シテヰル事デ、卽チロープ、レール、地下足袋、坑木等ガ極度ニ不足シタ。第三ニ、貨車廻リガ圓滑ニ行カズ、坑所貯炭ガ增ヘテ採炭ヲ抑制スル結果トナ

ツタコトデアル。第四ニ、無理掘ノ結果坑内事情ガ悪化シ自然發火ヲ生ジ或ハ斷層ニアタツタコト等ガ數ヘラレル。ト云フ結論ガ有煙炭礦業者ト總督府燃料課トノ座談的打合會（十五年十二月三日）ニヨッテ與ヘラレテヰル。此レハ換言スレバ一般的ニハインフレーションノ進展ニ伴フ再生產ノ物材塡補ノ困難デアルガ、特ニ有煙炭礦ニ於テソレガ顯現シタト云フ事ハ有煙炭資源ソレ自体ノ貧困ニ由來スル事モ勿論デアルガ、然シ埋藏炭量ハ必ズシモ不足シテヰルワケデハナク、シロソレヲ有利ニ稼行シ得ル事、即チ資材、勞力ヲ屯當リ非常ニ多額ニ必要トスルタメ、或ハ又地理的隔差ノ爲ニ、輸移入ニヨリ此ノ不足ヲ補充スル事ガヨリ有利デアルガ爲デアル。從ッテ國家經濟ノ立場カラ見ルナラバ、有煙炭ノ今後ノ增產傾向ハ第一ニ、朝鮮ヘノ輸送ニ便ナル國境ニ近イ方面ニ於ケル滿洲諸炭礦ノ生產力發展ノ如何並ニ同地方ノ石炭ノ幾何量ヲ朝鮮ニ對シ供出シ得ルカノ點、第二ニ、內地ヨリノ移入ガ船腹不足ノ今日尙何ノ程度迄可能デアルカノ點、第三ニ、鮮內ニ於ケル貨車輸送ノ限界、此ノ三ツノ條件ト朝鮮地內有煙炭開發ノ困難性トノ秤量ニヨリ朝鮮地內ノ有

炭山開發ノ如何ガ決セラレルノデアル。此ノ場合ノ秤量ハ個別資本ノ利害ニヨリ決セラルベキデナク、國家的公益的見地ヨリ假リニ滿鮮國境ノ滿洲側炭礦ニ鮮內有煙炭礦ヲ開發スベキ勞力資材ヲ集注スル事ガヨリ國家目的ニ合致スルトスレバ此ノ方面ニ開發ノ重點ガ置カル可キデアル。斯ウシテ假ニ滿洲ニ重點ヲ移シテモ現在ノ如ク有煙炭ノ不足ノ狀態ニアル以上、從來ノ鮮內有煙炭山ノ企業家ニ大ナル打擊トナル事モ考ヘラレナイノデアツテ、朝鮮有煙炭山開發助成ハ一應ノ限界ガアル事ニ注目スベキデアル。

無煙炭ニツイテ見レバ、有煙炭ト異リ出炭ヲ增加スベキ余裕ニ富ミ、無煙炭ノ消費市場サヘ確實ナラバ尙サシタル困難モナク相當量ノ增產モ可能デハアルガ、無煙炭ノ鮮內需要ニハ自カラ限度ガアリ、內地需要ハ木炭代用煉炭原料其他トシテ益々市場ヲ擴大シツヽアルニモカヽワラズ、船舶ノ輸送能力ニ於テ甚シク壓縮セラレルト云フ狀態デアル。要スルニ朝鮮無煙炭ノ向後ノ發展ハ第一ニ輸移出能力、第二ニ鮮內ニ於ケル無煙炭使用奬勵ノ實績如何、ノ二點ニ掛ツテヰルト見ルベキデアル。更ニ最

近ニ於ケル朝鮮經濟ノ變貌ニ伴フ跋行的發展ハ內鮮一體化ノ線ニソッテ朝鮮自体ノ自立性ヲ喪失セシメッヽアル傾向ニアルガ、此レハ同時ニ東亞共榮圈內ノ相互依存度ヲ高メル事ヲ前提トセネバナラズ、此ノ意味ニ於テモ滿洲トノ間ニ有無煙ノ交流ヲ行フ事ガ必要デアリ、コノ場合個々ノ利害ヲ越ヘテ全体ノ利益ヲ優先セシメネバナラヌ。

最近ノ無煙炭、出炭狀態ヲ見ルニ、無煙炭ノ增產速度ハ昭和十二年度以降有煙炭ヲシノギ、爆發的增產ガ行ハレ、十二年度一、一一三千屯カラ十五年度ニハ三、三六二千屯ト云フ驚ク可キ增產ヲ行ッタノデアルガ、今年度始メニハ內地ヘノ輸送能力ニ制限セラレテ出炭抑制氣味トナッタニモ拘ハラズ六月ニハ對前年二割余、七月ニハ四割余、八月ニハ三割八分ノ增產ヲ行ッタノデアル。此レハ內地ヘノ輸送力ノ增加ニヨルト云フヨリハ、移輸入有煙炭鑛定量確保ノ困難ト鮮內有煙炭增產實蹟捗々シカラザル爲ニ、鮮內ニ於ケル無煙炭便用勸奬策トシテ當局ニ於テモ新設ボイラーハ勿論既設有煙炭使用ボイラーヲ無煙炭用ニ轉換セシムルベク積極的ニ奬勵シテヰルト云フ事情ニヨルモノト云ヒ得ヨウ。シカシ實情トシ

第八表

日本石炭株式会社 企画部

炭種	岩田名	推定埋蔵量	坑鉱名	年	昭和13年		昭和14年		昭和15年	
				格	数量	価格	数量	価格	数量	価格
		万噸		円	噸	円	噸	円	噸	円
無	平南北部	49,154	龍登	55	156,775	818,540	166,112	1,449,13		
	〃		龍潭	99	69,699	335,780	92,011	662,248	120,083	
	〃		鳳泉	115	137,220	698,211	108,577	1,164,149	195,068	
	〃		新陽				13,913	119,689	84,323	
			平壌(炭層)							

第八表

昭和十四年度重要炭山指定炭砿累年出炭高

日本石炭株式会社 企画部

炭種	炭田名	推定埋蔵量	炭鉱名	昭和14年度経営者名	昭和6年 数量	昭和6年 価格	昭和7年 数量	昭和7年 価格	昭和8年 数量	昭和8年 価格	昭和9年 数量	昭和9年 価格	昭和10年 数量	昭和10年 価格	昭和11年 数量	昭和11年 価格	昭和12年 数量	昭和12年 価格	昭和13年 数量	昭和13年 価格	昭和14年 数量	昭和14年 価格	昭和15年 数量	昭和15年 価格
		万瓲			瓲	円	瓲	円	瓲	円	瓲	円	瓲	円	瓲	円	瓲	円	瓲	円	瓲	円	瓲	円
無煙炭	平南北部	49.154	龍登	大東鉱業							29.111	146.317	61.020	310.064	57.373	305.113	32.970	161.355	156.775	818.540	166.112	[illegible]	[illegible]	
	〃		龍潭	朝鮮無煙炭砿							44.004	206.815	42.887	179.193	27.185	122.310	36.681	196.399	69.699	335.780	92.011	660.248	120.083	
	〃		鳳泉	鳳泉無煙炭					19.798	49.191	50.489	228.307	40.101	200.552	34.868	167.963	29.304	140.895	137.820	698.211	108.577	1.164.049	195.068	
	〃		朝陽	朝陽炭砿																	13.913	119.689	58.373	
	〃		平壌(海軍)	海軍燃料廠	140.451	892.363	145.812	873.790	150.824	791.782	146.548	959.241	149.950	995.915	154.171	1.025.380	122.272	911.257	144.214	1.354.612	160.919	1.132.390		
	平南南部	30.000	黒嶺	朝鮮無煙炭																	120.893	1.154.348	391.362	
	〃		徳山	〃															87.593	653.927	114.103	1.190.528	131.287	
	〃		江東	〃	76.237	342.561	131.684	657.858	118.678	684.243	177.634	1.039.378	210.122	1.394.018	146.148	943.929	200.592	1.377.892	231.004	1.794.434	285.444	2.254.667	284.946	
	〃		元灘	〃											41.758	295.517	51.550	406.398	77.338	432.732	85.281	844.748	93.910	
	〃		三神	〃	68.514	334.055	109.374	588.604	137.031	896.110	173.067	1.123.014	207.932	1.426.915	121.820	964.898	110.108	900.758	156.452	1.396.103	149.425	1.812.769	124.009	
	〃		貞柏	〃	32.671	192.404	32.179	205.562	28.163	210.424	22.470	193.255	16.563	133.998	21.404	170.944	21.742	187.123	19.850	187.619	18.054	213.367	18.283	
	〃		坎北	〃											25.668	139.991	24.834	164.944	29.236	213.303	30.203	303.297	27.539	
	〃		大宝	〃	55.785	265.808	43.994	231.875	48.672	274.751	51.284	336.938	59.417	403.522	59.331	430.280	62.575	461.288	81.604	752.196	119.685	1.281.002	151.130	
	〃		江西	朝鮮無煙炭砿	83.622	441.623	106.403	615.663	126.827	838.075	132.446	938.191	125.449	930.394	126.281	929.969	126.115	1.010.208	108.806	814.338	109.435	816.837	70.918	
	〃		大文山	朝鮮無煙炭	20.502	142.358	29.783	239.072	35.835	296.705	46.553	404.821	57.334	528.907	61.290	571.235	48.454	478.261	47.192	522.837	36.056	563.781	13.534	
	文川	1.391	文川	〃	15.810	63.084	18.979	85.380	24.741	148.502	34.403	223.570	47.202	336.882	46.102	287.247	43.700	293.608	38.138	271.632	53.230	467.060	63.907	
	三陟	29.810	三陟	三陟開発																	134.664	1.249.334	620.061	
	和順	958	和順	全南鉱業											15.909	53.097	----	----	43.055	202.570	62.992	545.931	92.039	
			亀岩	南鮮炭砿											15.449	50.539	21.028	97.884	48.880	218.723	81.047	453.263	88.441	
有	阿吾地	3.000	阿吾地	朝鮮石炭工業	4.246	21.112	3.966	17.186			35.713	185.708	95.513	372.042	270.850	980.321	317.695	1.509.585	321.339	2.259.670	178.283	2.584.803	430.108	
	古乾原	5.000	承良																11.886	103.404	44.816	418.745	52.921	
	〃		古乾原	北鮮炭砿							24.281	115.249	30.844	162.454	80.791	426.754	68.386	415.588	102.845	975.646	144.874	2.041.522	226.604	
	穏城	700	豊仁	新和鉱業															51.224	308.339	134.863	850.396	158.772	
	会寧	11.320	花豊	岩村組																	14.629	182.030	32.991	
	〃		弓心	弓心炭砿															34.397	259.986	69.277	860.231	100.097	
	〃		雞林	朝鮮合同炭砿											67.412	375.092	138.325	778.985	118.657	1.187.655	99.653	1.439.273	98.596	
	〃		遊仙	岩村鉱業	19.211	124.853	31.254	197.641	64.045	366.921	106.190	718.139	139.080	991.961	166.730	1.188.799	169.403	1.246.385	212.733	2.564.292	170.987	2.932.839	191.849	

	〃		大宝	〃	55.785	265.808	43.994	231.875	48.672	274.751	51.284	336.938	59.417	403.522	59.331	430.280	62.575	461.288	81.604	552.770	117.685	1281.802	137.150
	〃		江西	朝鮮無煙炭砿	83.622	441.623	106.403	615.663	126.827	838.075	132.446	938.191	125.449	930.394	126.281	929.969	126.115	1010.208	108.806	814.338	109.435	846.837	70.918
	〃		大文山	朝鮮無煙炭	20.502	142.358	29.783	239.072	35.835	296.705	46.553	404.821	57.334	428.907	61.290	571.235	48.454	478.261	47.192	522.837	36.056	563.781	13.534
	文川	1.391	文川	〃	15.810	63.084	18.979	85.380	24.741	148.502	34.403	223.570	47.202	336.882	46.102	287.247	43.700	293.308	38.138	271.632	53.230	467.060	63.909
	三陟	29.810	三陟	三陟開発																	134.664	1249.334	620.061
	和順	958	和順	全南鉱業											15.909	53.097	----	----	43.055	202.570	62.992	545.931	92.039
			亀岩	南鮮炭砿											15.447	50.539	21.028	77.844	48.880	218.723	81.047	453.263	88.441
	阿吾地	3.000	阿吾地	朝鮮石炭工業	4.246	21.112	3.966	17.186			35.713	185.708	95.513	372.042	270.850	980.341	317.695	1597.585	321.339	2259.670	178.283	2584.803	430.108
	古乾原	5.000	承良																11.886	103.404	44.816	418.745	52.922
	〃		古乾原	北鮮炭砿							24.281	115.249	30.844	162.454	80.791	426.754	68.386	415.582	102.845	975.646	144.874	2041.522	226.604
有	穏城	700	豊仁	新和鉱業															51.224	308.339	134.863	850.396	158.792
	会寧	11.320	花豊	岩村組																	14.629	182.030	32.991
	〃		弓心	弓心炭砿															35.397	259.986	69.277	860.231	100.097
	〃		鶏林	朝鮮合同炭砿											67.412	375.092	138.325	778.985	118.657	1187.655	99.633	1439.273	98.596
	〃		遊仙	岩村鉱業	19.211	124.853	31.254	197.641	64.045	366.921	106.190	718.139	139.090	991.961	166.730	1.188.797	169.403	1246.386	219.733	2.561.292	170.987	2.932.839	191.849
煙	〃	2.000	訓戎	富士炭砿			1.952	10.930					17.758	104.670	39.578	229.741	40.428	233.751	67.904	534.274	59.775	595.435	104.645
	羅南	1.759	羅南	羅南炭砿															7.815	61.937	7.380	98.118	4.891
	生気嶺	2240	生気嶺	生気嶺炭業	40.034	216.211	36.113	178.352	30.773	144.867	29.865	129.405	38.119	191.194	46.929	277.490	----	----	67.521	530.289	105.761	704.429	201.947
	〃		朱乙	朝鮮窒素肥料	2.063	10.927													83.352	367.823	112.641	872.449	122.745
	大門洞	232	龍峴	日鮮砿業			8.368	21.486	21.237	87.935	29.379	146.150	33.344	182.796	31.051	178.157	29.953	169.689	30.999	214.611	93.611	676.165	183.350
炭	朱南		会文	会文炭砿																	90.397	441.214	43.702
	明川吉州	2.000	昭和	昭和炭砿業所	35.126	206.567	28.228	148.442	26.273	134.679	21.249	111.278	12.659	64.109	12.927	63.148	----	---	7.386	62.929	10.578	126.176	11.708
	〃		古站	英殖鉱業	5.092	28.915	4.345	22.798													7.326	56.649	13.156
			北鮮																6.530	50.370	10.692	84.465	
	咸興	10	咸興	朝鮮合同炭砿	20.855	94.855	32.989	155.987	42.841	205.360	41.262	213.532	42.363	203.668	39.996	190.334	26.309	127.242	22.498	167.086	39.296	463.982	46.649
	安州	100	安州	明治鉱業	55.687	315.350	66.302	345.685	60.568	285.949	56.509	291.050	52.369	273.022	62.061	322.981	57.036	312.198	65.181	429.497	59.549	554.174	71.874
	鳳山	500	沙里院	仝上	2.009	11.227	15.819	87.556	42.700	208.514	74.006	416.189	106.256	603.336	715.253	1.017.537	180.342	1.132.698	229.307	1.774.847	249.539	2.628.511	313.695

(註) 14年マデハ総督府調ベヨリ
15年度ハ、日満支石炭聯盟調ベヨリ

テハカ、ル傾向ハ一朝ニシテ効果ヲ現スベクモナク、一方ニ內地ヘノ移出ハ依然トシテ不振デ無煙炭ノ貯炭ヲ增加セシメ、坑所港頭ヲ合シ八月末貯炭高ハ一百六十七万屯ニ達スルト云フ有樣デ無煙炭增產ト其ノ需要特ニ輸送能力トガ並行セヌト云フ生產ノ無計畫、矛盾ヲ露呈シッ、アル。

問題ヲ轉ジテ個々ノ炭礦ニツキ檢討スルタメ主要炭山ノ出炭推移ヲ十四年度重要炭礦トシテ指定セラレタルモノニツキ第八表ニマトメテ表出シ各炭礦ノ盛衰ヲ知ルニ便ナラシメル事トシタ。

即チ十四年度一〇万屯以上ノ出炭ヲ見タモノハ無煙デハ江東、平壤(海軍)三神、三陟、黑嶺、大貴、德山、江西、鳳泉、龍潭ノ順デ九炭礦デアルガ、十五年度ニハ三陟ノ開發ガ進展シ六二万余屯ノ出炭ヲ行ヒ第一位ニ飛躍シ同ジク昭和十三年七月ヨリ着手シタ新坑ノ黑嶺ノ發展目覺シク、出炭ハ三十九万余屯ニ達シテ二位ニ位シテヰル。斯クノ如ク新坑ノ躍進ヲ見ナガラ十五年度ニ於テ十万屯以上出炭セル炭礦ハ前年ヨリ僅カニ一礦ヲ加ヘタノミデ小炭礦ノ成長或ハ老年炭礦ノ若返リハ余リ行ハレテヰナイ。一方有煙炭山ニアッテハ十四年ニハ沙里院ヲ筆頭ニ遊仙、阿

出炭（第九表）

（單位噸）

炭鉱名	品種	11年 上	11年 下	12年 上	12年 下	13年 上	13年 下	14年 上	14年 下	15年 上	15年 下	16年 上	16年 下	摘要
鹿鐵鉱業所	塊	5.13	4.71	6.21	9.54	13.39	18.26	27.08	25.79	24.42	32.84			
	特粉	1.11	1.62	1.36	2.06	2.90	3.56	5.86	5.58	5.25	6.07			
	粉	6.92	6.38	8.48	12.87	18.07	24.65	36.56	34.82	32.76	39.35			
	計	8.54	7.85	10.48	14.89	22.31	30.43	44.38	42.99	40.45	54.26			

出炭（第九表）

（單位瓲）

炭礦名	品種	11年		12年		13年		14年		15年		16年		摘要
		上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	
亀嶽鉱業所	塊	513	471	627	954	1,339	1,826	2,708	2,579	2,427	2,804			
	特粉	1,111	1,021	1,362	2,066	2,900	3,956	5,868	5,589	5,259	6,075			
	粉	6,923	6,358	8,488	12,872	18,072	24,651	36,562	34,823	32,764	37,850			
	計	8,547	7,850	10,479	15,892	22,311	30,433	45,138	42,991	40,450	46,727			
思城無煙炭礦	切込							1,154	2,413	2,071	7,066			
全南鉱業株式会社 和順採鉱所	〃	13,107	8,403	14,806	12,340	14,500	21,750	44,400	44,850	51,000	37,800			塊,粉炭ノ率ハ東岩炭四六丸西炭六、四ニシテ切込ヲ篩分ケルモノトス
三陟炭礦	塊					—	—	17,000	19,000	27,000	34,000			13年度ハ起業工事中ニ副シ主トシテ開鑿炭ナリ、14年度ヨリ一部営業採炭ヲ開始セリ
	粉					—	—	—	3,000	4,000	2,000			因ニ当社ハ昭和14年度54万瓲、15年度85万瓲、16年度100万瓲ノ出炭予定計画ニ依リ目下実施シツヽアリ
	切込					8,000	92,000	118,000	305,000	274,000	279,000			
	計					8,000	92,000	135,000	327,000	305,000	315,000			
龍登鉱業所	塊	—	—	2,568	7,522	20,104	20,825	23,424	22,667	13,001	7,967			
	中小塊	—	—	4,769	4,050	—	—	10,222	11,320	1,283	2,648			
	粉	—	—	26,783	45,717	68,649	68,923	73,128	66,228	92,772	95,567			
	切込	—	—	2,570	578	—	1,700	—	—	—	1,170			
	計	—	—	36,690	57,867	88,753	91,448	106,774	100,215	107,056	107,352			
大東鉱業株式会社 高原鉱業所	塊									2,110	3,215	4,285		
	中小塊									2,010	4,015	5,115		
	粉									32,297	81,483	100,840		
	計									36,417	88,713	110,240		
鳳泉無煙炭礦KK		19,982	17,345	17,836	18,646	38,713	56,410	58,244	75,114	100,223	86,570			
江西炭鉱	粉	66,250	62,600	66,270	57,200	56,920	48,500	40,000	33,550	36,600	35,888	34,232		
龍潭炭鉱	〃	31,590	21,070	16,900	20,800	30,000	31,400	31,800	43,000	69,300	54,490			
江東炭坑	〃	不	明	92,612	107,720	101,472	115,600	130,584	178,199	165,340	139,794			
馬嶺炭坑	塊										1,110			
	粉						46,050	47,683	160,713	189,658	177,672			
	計						46,050	47,683	160,713	189,658	178,782			
元灘炭坑	粉	15,543	25,462	33,147	29,974	31,630	30,129	35,099	42,235	41,773	35,079			
大宝炭坑	〃	31,400	31,974	34,525	35,995	38,494	36,940	40,816	59,860	70,241	73,964			上 1月—6月 / 下 7月—12月 暦年ニヨル
德山炭坑	〃	16,589	7,315	20,399	27,533	24,550	26,726	57,967	61,118	70,535	64,045			
三神炭坑	〃	56,950	67,967	63,623	61,299	61,850	62,010	59,128	76,909	64,396	62,032			三神特粉
貞柏炭坑	粉	10,941	10,070	10,550	10,462	10,524	8,353	9,420	8,914	10,245	8,979			
德川炭坑		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			未ダ出炭ナシ
新倉炭坑	粉										22,600			
朝陽炭坑	切込						8,306	28,560	39,016	28,072	30,302			

吾地、古乾原、花豐、朱乙、生氣嶺ノ大炭礦ガ十万屯以上ヲ產出シ、十五年ニハ阿吾地ガ第一位トナリ、沙里院、古乾原、生氣嶺、遊仙、龍峴、豐仁、朱乙、訓戒、弓心ノ十炭礦ガ十万屯ヲ突破シ得テヰル。

次ニ昭和十一年以降內地ニ移入セラレル主要各炭礦ノ塊粉切別上期、下期別ノ出炭ヲ一表ニマトメ第九表トシ參考ニ供スル。

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

鉱区

ガ如煙モト　ル体目於タデラ、レモ

第　表　　資本及経営状態　（十五年度末現在）

会社名	所属炭鉱	資本金	払込金	国家資本関係	財閥系統	財閥出資割合	創業時	鉱区
朝鮮	新倉炭鉱	千円 20,000	千円 20,000	東拓ヲ通ジ投下	三菱	東拓32%三菱18%	昭和12年7月	2鉱区
〃	黒嶺炭鉱	〃	〃	〃	〃	〃	昭和13年7月	4鉱区
〃	徳山炭鉱	〃	〃	〃	〃	〃	昭和8年5月	3鉱区
〃	江東炭鉱	〃	〃	〃	〃	〃	大正8年5月	4鉱区
〃	元灘炭鉱	〃	〃	〃	〃	〃	昭和4年9月	1鉱区
〃	三神炭鉱	〃	〃	〃	〃	〃	昭和8年3月	2鉱区
〃	貞柏炭鉱	〃	〃	〃	〃	〃	大正10年	1鉱区
〃	大宅炭鉱	〃	〃	〃	〃	〃	大正5年	----
朝鮮無煙炭鉱株式会社	龍潭炭鉱	5,000	3,700	ナシ	—	—	昭和8年1月	5鉱区
〃	江西炭鉱	〃	〃	〃	—	—	大正13年4月	10鉱区
鳳泉無煙炭鉱株式会社	鳳泉無煙炭鉱	〃	3,750	〃	—	—	----	----
大東鉱業株式会社	能登鉱業所	20,000	12,500	〃	片倉系統	100%	昭和7年	3鉱区
〃	高原鉱業所	〃	〃	〃	〃	〃	昭和13年8月	9鉱区
三陟開発株式会社	三陟炭鉱	15,000	7,500	〃	日本電力	47%	昭和11年4月	32鉱区
朝陽鉱業株式会社	朝陽炭鉱	5,000	1,550	〃	—	—	昭和13年4月	1鉱区
日産化学工業株式会社	恩城無煙炭鉱	124,000	108,500	〃	日産系統	100%	昭和13年	3鉱区
南鮮炭鉱株式会社	亀巌鉱業所	500	500	〃	—	—	----	----
全南鉱業株式会社	和順採鉱所	〃	250	〃	鐘紡系統	100%	--	--

（註）十五年度出炭ハナイガ、朝鮮無煙炭ノ手デ徳川炭鉱ガ開発セラレツヽアル

第十表　最近無煙炭経営者別出炭並船積状況調

（単位千瓲）

経営者名	炭礦名	出炭 15年度 上期	出炭 15年度 下期	出炭 15年度 計	出炭 15年度 總計ニ対スル百分率	出炭 16年度 計画	船積数量 15年度 上期	船積数量 15年度 下期	船積数量 15年度 計	船積数量 總計ニ対スル百分率
朝鮮無煙炭	新倉	-	90	90	2.6	＼				
	黒嶺	183	208	391	11.3					

第十表　最近無煙炭経営者別出炭並積出状況調

（単位千瓩）

経営者名	炭礦名	出炭 15年度 上期	出炭 15年度 下期	出炭 15年度 計	出炭 15年度 總計ニ対スル百分率	出炭 16年度 計画	船積数量 15年度 上期	船積数量 15年度 下期	船積数量 15年度 計	船積数量 總計ニ対スル百分率
朝鮮無煙炭	新倉	-	90	90	2.6					
	黒嶺	183	208	391	11.3					
	徳山	64	67	131	3.8					
	江東	141	144	285	8.2					
	元灘	38	36	74	2.1					
	三神	64	60	124	3.6					
	貞柏	10	8	18	0.5					
	坎北	13	14	27	0.8					
	大宝	68	83	151	4.4					
	大文山	12	2	14	0.4					
	文川	33	31	64	1.9					
	計	626	743	1,369	39.6	2,070	357	255	612	40.7
朝鮮無煙炭礦	龍潭	58	62	120	3.5					
	江西	38	33	71	2.0					
	計	96	95	191	5.5	240	66	35	101	6.7
鳳泉無煙炭	藍田	-	28	28	0.8					
	鳳泉	94	81	175	5.1					
	麻城	2	2	4	0.1					
	計	96	111	207	6.0	230	50	41	91	6.1
大東鉱業	龍登	102	100	202	5.9					
	高原	59	108	167	4.8					
	飛鳳	12	2	14	0.4					
	計	173	210	383	11.1	460	75	63	138	9.2
三陟開発	三陟	305	315	620	17.9	800	171	286	457	30.5
朝陽炭鉱	朝陽	28	30	58	1.7	80	29	14	43	2.8
日産化学工業	思城	3	13	16	0.5	30	1	1	2	0.1
南鮮炭鉱	亀巌	41	47	88	2.5	100	18	7	25	1.7
全南鉱業	和順	37	55	92	2.7	120	17	16	33	2.2
朝鮮電力	寧越	184	198	382	11.0	500				
聞慶社	聞慶	5	7	12	0.3	20				
朝鮮窒素肥料	龍門	21	12	33	1.0	100				
岩村鉱業	江東	4	4	8	0.2					
其他						60				
總計		1,619	1,840	3,459	100.0	4,810	784	718	1,502	100.0

（註）鳳泉社藍田ハ会社系洞鉱ノ出炭高11千瓩ヲ含ム
16年度出炭計画ハ物動計画ニ依ル

以上炭礦別ノ出炭狀況ニツキ論述シ來ツタノデアルガ此レ等諸炭礦ガ如何ナル經營者ニヨツテ稼行セラレテヰルカ、更ニ又其レ等經營者ガ如何ナル財閥ニヨリ統率セラレテヰルカヲ檢討シテ見ヨウ、尙此場合有煙炭礦デハ朝鮮窒素ヲ除ケバ殆ド一經營者一炭礦デアリ、其上財閥系統モ殆ド無ク、カ、ル點カラモ問題ヲ資料ノ得ラレタ無煙炭ニ限定スル事トシタ。

最近ニ於ケル經營者別出炭並ニ積出狀態ヲ見レバ第十表ノ如クデアル。

本表ニツキ見レバ、十五年度實績ニ於テ朝鮮無煙炭社ガ出炭ニ於テ全體ノ三九・六%ヲ、積出高ニ於テ四〇・七%ヲ獨占シテヰル點ヘ特ニ注目ニ値ヒスル、同社ハ前述セル如ク日韓併合後間モナク大正二年政府ニ於テ保留シツ、アツタ平安南部炭田ヲ產業奬勵策トシテ三菱ニ下附セラレタノヲ基礎トシテ、半島ニ於ケル採炭機構ノ生長發展ノ基軸トナツタノデアル。シカモ特ニ注目ニ値スル點ハ第十一表ノ示ス如ク內地ニ移入セラレテヰル無煙炭礦ノ大部分ガ日本內地ノ諸財閥ニヨリ實權ヲ把握セラレ、內地ニ於ケル自己系統ノ工場ヘ供給スベキ原料ヲ確保スル形態ヲ取ルモ

三陽開發株式会社事業関係図

メヤ、或ハ自己系統ノ商事會社ヲシテ內地ヘ移入セシメ此ノ間ノ商業利潤ヲ確保スルト云フ形態ヲ取ルモノモアル。斯クノ如ク朝鮮ニ於ケル無煙炭礦ノ大部分ガ內地巨大財閥ニヨッテ何等カノ意味デ實質的支配ヲ受ケテヰルト云フ事ハ此レ等炭礦ノ經營上ノ基礎ヲ强固ナラシメテヰルガ、其ノ反面親財閥ノ爲ニ犧牲ヲ要求セラレル一種ノ安全辨タル役割ヲ演ゼシメラレル事ガ必ズシモ無イトハ云ヘナイ。朝鮮ニ於ケル新興三大無煙炭礦ニツキ其ノ開發狀況ヲ報ゼル論文ガ朝鮮鑛業會誌上發表セラレテアッタガ參考迄ニ抄出スル事トスル。

三陟炭礦ハ從來地理的ニ惠マレヌ故ニ開發ガ遲レ、江原道東海岸ニ總督府ノ保留炭田トシテ死藏セラレテヰタ三陟炭田ニ對シ、昭和七年頃ヨリ開發ガ問題トナッタガ、其ノ起業ニ尨大ナ資金ヲ要スル事トテ思フニマカセズ、昭和十一年四月三陟開發株式會社（同五〇〇万圓）及ビ三陟鐵道株式會社（現在資本金一、五〇〇万圓）ガ日本電力系資本ニヨリ開發ニ着手セラレ、同時ニ附帶事業トシテノ化學工業等ヲモ合セ大開發計畫ヲ樹立シタノデアル。現在デハ總督府保留炭田三十二鑛區三、〇五〇万坪ノ

開放ヲ受ケ、三陟炭礦ノ開發並ニ北三化學工業所ノ經營ニ着手シテヰル。

炭層ハ所達區ハ斷層多ク不整デアルガ、其他地區ハ地層ガ非常ニ整然ト發達シ、朝鮮ニ於テハ他ニ類例ヲ見ナイ良好ナ狀態デアル。炭層ハ七層、内稼行可能ハ、二或ハ三層デ層厚ハ六ー十米ニ及ブ。又地方水準以上ノ炭量ガ二、五〇〇千屯以上モアル見込デ、其上炭層狀態ガ良好デ大部分一次塊炭層ヨリ成ルガ故ニ内地同樣集約採炭ガ可能デアル。現在採炭ハ全テ水平坑道ニヨリ「カラシキ」採炭（地方水準以上ノ採炭）ヲ行ヒツヽアルガ、未着手ノ文岡里區ノ稼行或ハ水準以下ノ採掘ニ着手シ、坑道ニ拍車ヲ掛ケントシテヰルガ、問題ハ輸送力ト勞働力ニヨッテ限界附ケラレテヰル。

德川炭礦ハ夙ニ總督府燃料選鑛研究所ニヨリ地質調査、露頭調査ヲ行ヒ昭和六年頃ニ其ノ有望性ガ廣ク傳ヘラレテヰタノデアルガ、其ノ交通ノ不便ノ爲今回朝鮮無煙炭會社ニヨリ開發計畫ヲ實行スル迄ハ放置セラレテヰタ。昭和十二年以後ニ於ケル調査ノ結果ヲ見レバ、露頭延長七〇〇粁、稼行可能炭ハ三層デ内一層ハ他ノ無煙炭田ニ類例ヲミヌ炭丈ヲ有

スルト云フ事ガ明確トナツタ。

現在採掘シテヰル區域ノ石炭ハ大体灰分十%前後、揮發分四一六%、火着モカナリ良好デ火持モ良イ。主トシテ微粉炭デアルガ、二割程度ノ二次塊炭ヲ出シ得ル見込デアルト云フ。採炭準備ハ着々進行シテヰル処此ノ輸送路ハ姉妹會社西鮮中央鐵道ニヨリ局線勝湖里驛ヨリ炭坑迄ノ鐵道建設中デ、一方採炭設備モ炭層ガ比較的安定セルヲ利シテ長壁法ヲ採用シ、運炭設備モ最新式ノ体系ヲ採用セントスルモノデ、剥岸無煙炭採掘ニ一時期ヲ劃セント意氣込シデヰル。

最後ニ高原炭礦ハ片倉系大東鑛業社ニヨリ昭和十三年十二月以來着手セラレタ新炭礦デアルガ、着々計畫ト出炭ヲ並行的ニ行ヒ、早クモ相當多數ノ出炭ヲ行ツテヰル。當礦區ハ昭和二年ニ總督府燃料選鑛研究所デ其ノ有望性ヲ發表シ、昭和四年片倉系會社ニヨリ本炭田ヲ獨占シ、十二年以後大東鑛業社ガ一切ヲ繼承シタモノデアツタ。位置ハ前述セル如ク平元線ニ沿ツテ咸南、平南ノ道境ニアリ、交通ハソレ故比較的便利デ、坑所ト驛ノ間ハ現在自動車デアルガ、將來輕便鐵道ヲ敷設セントシテヰ

ル。地質ハ二疊石炭紀ニ屬シ、基底寒武利亞奧陶紀上ニ順次ニ紅色岩層灰炭層、綠色岩層及河成岩層、岩層ガ生疊シテヰル。炭層ハ上、下二群ニ別レ、下部ハ六、七枚アルガ稼行價値ナク、上部ハ三層アリ、最上層ノミガ非常ニ良好デアル、層厚ハ均一デナク「レンズ」狀ポケツト狀ヲ呈スル物ガ多イ、最モ厚イ所ハ二十六米位モアリ、夾雜物ガ余リナイ。

走向傾斜ノ如キハ全ク不定デ炭層ハ非常ニ亂レテヰル。炭質ハ一般ニ暗黑色デ、粗粉ザラメ質ト薄板狀デ前者中ニハ一次塊ヲ包含スル。分析ニ付テハ炭質ノ節ニ於テ述ベタノデ省略スル。稼行ノ都合上本炭田ヲ雲谷、山谷水洞三區ニ分チ現在ノ出炭ハ運搬ニ便ナ山谷區ヨリナサレ、水洞區ハ未着手ノマヽ殘サレテヰル。現在ノ採炭ハ垂直距離約三十米毎ニ沿層坑道ヲ掘進シ、炭層ニ甚シイ變化ガナケレバ普通五十米毎ニ區劃シ、後退式長壁法デ拂ヒ、層ノ厚イ處ハ上ノ沿層坑道ニ對スル切眷坑道或ハ坑外カラ土砂ヲ撒入シ充塡ヲ行ッテヰル。選炭ハ選炭機設置ノ豫定デアルガ現在ハ堅万斛ニヨリ塊粉ニ分チ、塊ハ簡單ナ手選ヲ行ッテヰル。

第十二表

朝鮮内地設備比較表

		朝鮮				内地				比較				備考
		台数		KW		台数		KW		台数		KW		
		実数	十万瓩当リ	總KW	十万瓩当リ	実数	十万瓩当リ	總KW	十万瓩当リ	実数	十万瓩当リ	總KW	十万瓩当リ	
圧	35KW未満	37	0.9	740	1.8	126	0.3	2520	0.5	89	−0.6	1780	[illegible]	

此 業 ノ 要 生 ノ 資 マ 明 ル 〆。 比

第十二表

朝鮮内地設備比較表

		朝鮮				内地				比較				備考
		台数		KW		台数		KW		台数		KW		
		実数	十万瓩当リ	総KW	十万瓩当リ	実数	十万瓩当リ	総KW	十万瓩当リ	実数	十万瓩当リ	総KW	十万瓩当リ	
壓気機	35KW未満	37	0.9	740	1.8	126	0.3	2,520	0.5	89	-0.6	1,780	-1.3	
	35-100KW未満	60	1.4	3,900	9.4	409	0.8	26,585	6.5	349	-0.6	[illegible]	[illegible]	[illegible]カナル壓気機数ガ大ナル点注目スルヲ要ス
	100KW以上	8	0.2	960	2.3	223	0.5	26,760	5.5	215	0.3	25,800	3.2	
	計	105	2.5	5,600	13.5	758	1.6	55,865	11.5	653	-0.9	50,265	-2.0	
鑿岩及截炭機		1,018	24.6			12,399	25.5			11,381	0.9			カッターガ内地ニ於テハ2,275台存スルニ反シ朝鮮ニハ一台モ存シナイ
坑内運搬機	35KW未満	100	2.4	2,000	4.8	2,253	4.6	45,060	9.3	2,153	2.2	43,060	4.5	内地ニ於テハ坑内運搬機1,591台ガ内訳ガ無イタメ別個ニ計上シタ
	35-100KW未満	84	2.0	5,460	13.2	673	1.4	43,745	9.0	589	-0.6	38,285	-4.2	
	100KW以上	21	0.5	2,520	6.1	569 (1,591)	1.2 (3.2)	68,280	14.0	548 (1,591)	0.7 (3.2)	65,760	7.9	
	計	205	4.9	9,980	24.1	3,495	7.2	157,085	32.3	3,290	2.3	147,105	8.2	
排水設備	35KW未満	384	9.3	7,680	18.6	1,477	3.0	29,540	6.1	1,093	-6.3	21,860	-12.5	
	35-100KW未満	14	0.3	910	2.1	464	1.0	30,160	6.2	450	0.7	29,250	4.1	
	100KW以上	1	—	120	0.3	361	0.7	43,320	8.9	360	0.7	43,200	8.6	
	計	399	9.6	8,710	21.0	2,302	4.7	103,020	21.2	1,903	-4.9	94,310	0.2	
通風設備	10KW未満	214	5.2	1,712	4.1	1,989	4.1	15,912	3.3	1,775	-1.1	14,200	-0.8	
	10-35KW未満	48	1.2	960	2.3	184	0.4	3,680	0.7	136	-0.8	2,720	-1.6	
	35-100KW未満	6	0.1	390	1.0	135	0.3	8,775	1.8	129	0.2	8,385	0.8	
	100KW以上	—	—	—	—	97	0.2	11,640	2.4	97	0.2	11,640	2.4	
	計	268	6.5	3,062	7.4	2,405	5.0	40,007	8.2	2,137	-1.5	36,945	0.8	
機械選炭場	一日平均取扱炭量200瓲未満	12	0.3	1,800	4.4	90	0.2	13,500	2.8	78	-0.1	11,700	-1.6	
	200-300瓲未満	4	0.1	1,000	2.4	56	0.1	14,000	2.9	52	—	13,000	0.5	
	300-1,000瓲未満	—	—	—	—	31	0.1	20,150	4.1	31	0.1	20,150	4.1	
	1,000瓲以上	—	—	—	—	60	0.1	72,000	14.8	60	0.1	72,000	14.8	
	計	16	0.4	2,800	6.8	237	0.5	119,650	24.6	221	0.1	116,850	17.8	

（註）朝鮮ハ総督府調 14年末現在
内地ハ商工省調 13年末現在

第三節　技術水準ノ諸問題

資材ノ不足ハ單ニ內地ノミノ問題デハナク、朝鮮ニ於テモ亦同樣此ノ問題ハ深刻ナルモノガアル。然モ此ノ問題ハ朝鮮自体機械器具工業ノ前述ノ如キ未發達ニ基ク。炭礦資材ノ日本內地ヘノ依存度ハ最近ニ於ケル朝鮮工業ノ飛躍的發展ニモカヽワラズ炭礦必要資材ノ鮮內ニ於ケル確保ハカヘツテ相對的ニ困難ヲ加ヘ、益々內地生產手段生產部門ニ對スル依存度ヲ高メツヽアル。此ノ點カラモ朝鮮ノ近代化ハ構造的ナ近代化デハナク、表面的假象ニトヾマリテ朝鮮ノ資本主義化ヲ云々スル者ガアルトスレバ大イナル誤リト云ハネバナルマイ。

斯クノ如キ資材入手ノ困難ガ一ツノ原因トナツテヰルトハ云ヘ、朝鮮諸炭礦ノ技術水準ハ世界的水準ヨリ遙カニ遲レテヰルトハ云ハレル內地ノ水準ト比較スルモ更ニ非常ニ低位ニアル事ニ注意セネバナラヌ。第十二表ハ朝鮮ニ於ケル全炭礦業ノ諸設備ト內地全炭礦ノソレトヲ比較シテ一表ニ纏メタモノデアル。

本表ノ比較ガ臺數ノミヲ問題トシテモ尙內地トノ技術水準ノ差異ハ明瞭トナルデアラウ。

壓氣機ハ機械採炭ノ中核トシテ重要性ヲモツモノデアルガ、臺數ニツキノミ見レバ十萬瓲當リ內地ノ方ガ〇九臺少クナイ樣デアルガ、能力ノ點カラ見レバ多數ノ採炭機其ノ他ヲ運轉スルニ必要ナ、換言スレバ本格的機械採炭ニ要スル高性能ノモノヲ一應一〇〇キロワット以上ノモノトスルモ、朝鮮ニ於テハ十萬瓲當リ〇二臺ニ過ギヌニ對シ內地ニ於テハ〇五臺ニ當ル。繫岩機及ビ碎岩機臺數ノ點ヨリ見レバ、兩者ノ差異ハ比較的少ナク十萬瓲當リ約一臺トナツテヰルガ、此處デ注目ニ値スル事ハ非常ニ高イ能力ヲ示シ得ル截炭機ニ於テ內地デハ二七五臺存スルニ對シ朝鮮ニ於テ全ク使用セラレテヰナイ點デアル。

更ニ技術水準ヲ最モ集注的ニ表現スル坑內運搬（特ニ切羽並ビニ本卸坑道ノ卷上動力）ニツキ比較スレバ、十萬瓲當リ朝鮮ハ內地ノ半バニモ達シ得ヌ有樣デアル。

排水設備ニツキ見ルモ、朝鮮ニ於テハ局部的小形ポンプヲ多數使用

シ、大形ボンブノ設備ガ比較的少ナイ事ハ三五キロワット未滿ノ小ボンブニ於テ十萬瓲當リ六三臺モ多イニ反シ一〇〇キロワット以上ノモノ僅カニ一臺ニ過ギヌ事ガ此ノ間ノ事情ヲ最モ明白ニ物語ツテヰル。

通風設備ノ點デハ局部扇風機ヲ使用スルニ止マリ体系的ニ大規模ノ通氣ハ未ダ一般的ニ行ハレテヰナイ事ハ三五ー一〇〇キロワットニ於テ僅カ六臺一〇〇キロワット以上ニ於テ設備皆無ナル事ヲ指摘スレバ足リヨウ。

最後ニ選炭設備ニツキ見レバ、選炭能力ヲ集計シテ見ルト朝鮮ニ於ケル機械選炭ノ能力ハ一日二千八百瓲ニ過ギズ。此レニ對シ内地ニ於テハ一日十二萬餘瓲デアリ出炭ニ對スル割合ハ便宜上此レヲ年間ニ直シテ其ノ出炭ニ對スル割合トシテ計算スレバ朝鮮ニ於テハ二割四分、内地ニ於テハ八割七分ト云フ事ニナル。此レハ設備ガ一〇〇%ノ運轉ヲ事實上行ツテヰナイ事ヤ計算上ノ便宜上一應全能力ヲ年間三百五十日「フル」ニ運轉シタモノトシタガ故デ實質上機械選炭ニヨリ選炭セラレル商品炭ハ遙カニ少クナイモノトセネバナラヌ。

以上デ一應内地トノ比較ニ於テ朝鮮ニ於ケル技術水準ノ低位性ヲ論證シタノデアルガ、此ノ如キ低位性ノ問題ハ勿論前述セル如キ自然的諸條件ニヨリ當然ノ如クニモ見ラレルガ故ニ「コールカツター」ノ如キハ殆ド使用ノ必要ガナイ。又機械運搬ノ如キモ長壁法等ノ体系立ツタ採炭法式ガ取ラレネバ切羽ノ機械運炭ハ非常ニ困難デアル。

所ガ朝鮮無煙炭特ニ平壌南部炭田ノ如キハ炭層ガ亂レテキル上ニ殆ンド狀ヲ呈シ、長壁式採炭ハ殆ド不可能デアル。從ツテ坑内運炭系統ヲ計畫的ナ整然タル体系ヲ立テ得ズ、此ノ面ニ於ケル技術發展ヲ阻害スル事モ一應認メラレル。特ニ選炭ノ如キハ泥狀微粉炭ナル爲、篩ノ目ニ附着シテソレヲ塞ギ、水洗ヲスル場合ニハ灰分トノ比重差ガ少ナク分離ガ困難デ、シカモ水分ガ切レ難イ等ノ爲ニ機械選炭ノ進歩ガナサレテヰナイ。

以上ノ如ク技術水準停滯ノ一因ガ炭層ノ狀態或ハ炭質等ノ特質カラ不可避的ニモタラサレタ如クデアルガ、其ノ本質的原因ハ必ズシモカ

カル自然的條件ニ依テノミ規制セラレテヰルノデハナク、寧ロ朝鮮ニ於ケル炭礦夫ノ低賃銀ニヨッテヰル事ヲ知ラネバナラナイ。假リニ鑛夫賃銀ガヨリ高イトスレバ其ノ負擔ニ堪ヘ難ク其ノ炭層ニ適合スル技術ヲ取リ入レルカ、或ハ稼行ヲ停止スルカノ何レカヲ撰バネバナルマイ。炭層ノ條件ガ惡ケレバ其ノ商品ガ市場ニ於テ價値ヲ實現シ得ルモノデサヘアレバ當然前者ヲ撰ブ事ニヨリ甑當リヨリ多クノ生產手段ヲ投ジテモ出炭ヲ行ヒ、結局技術水準ハ益々高メラレル事トナラウ。

斯ク論ズレバ明瞭ナル如ク朝鮮炭礦業ノ技術水準ノ低位ハ根本的ニ朝鮮ノ經濟的、社會的特異性、具体的ニハ半農民的（零細生產者ノ家計補助的）賃銀勞働者ノ故ニ技術ヘノ代置ガ剌戟セラレナカツタノデアル。

次ニ內地ニ移入セラレル朝鮮諸炭礦ノ主要設備ヲ一覽表トシテ十三表ニ作成シタノデアルガ此レ等諸炭礦ハ朝鮮ニ於ケル諸他ノ炭礦ニ比スレバ非常ニ高イ水準ニ置カレテヰル事ヲ銘記シツ、本表ヲ見ル時ハ別段一般ノ炭礦技術水準ヲ推察シ得ル事ト思フ。

現在

要

中進捗

完成

以ナニ事ノルヨ飛場法デノレ

朝鮮無煙炭礦技術水準一覧

第十三表

昭和十五年末現在

生産業者	炭礦名	主ナル採炭方法	採炭機械使用状況	運炭設備 切羽	運炭設備 片盤	卸坑道 巻揚力	卸坑道 深サ	卸坑道	運炭	摘要
全南鉱業	竜巌鉱業所	沈下堀採炭	十シ	手押炭車	手押炭車	50 HP	垂直予定140m		手撰炭	第一本卸坑目下堀進中
	和順採鉱所	残柱式採炭	〃	片盤昇卸	車道敷設	計85HP	43m-73m		手撰炭	
日産化学	思城無煙炭坑	残柱式	手堀	戸樋流シ	手押	十シ	152m-184m	横坑	万斛手撰炭	
三陟開発	三陟炭礦	長壁法(前進後退)	採炭機械一式使用	シュート	炭車	2,000HP	200m	横坑	機械撰炭	水送設備近ク完成
大東鉱業	龍登鉱業所	沈下堀採炭	RBP型23台ヲ使用ス			20HP	150m	斜坑	機械撰	
	高原鉱業所	長壁法	100HP空気圧縮機4台	鉄製槌	手押又ハ捲機				手撰及万斛	16年度
鳳泉無煙	鳳泉無煙炭礦	露天堀ニ坑内残柱式	鑿岩機9台	ﾂﾙﾊｼ運搬	手押炭車	不明	不明		機械手撰兼行	
朝鮮無煙炭礦	江西炭鉱	残柱式	十シ	炭車手押	捲揚機	計440HP	70m-300m	斜坑	金網撰炭	
	龍潭炭鉱	〃	〃	手押	炭車手押	30 HP	150m-160m		〃	
朝鮮無煙炭礦	江東炭坑	上向階段堀及充填採堀	ツルハシ ショベシ	豆炭車	エンドレス捲テール捲	計550HP	200m-600m		機械撰炭	起業準備中
	黒嶺炭坑	昇向階段堀採堀	鑿岩機77台	戸樋流シ	手押	計220HP	100m-150m		〃	
	元灘炭坑	残柱式	十シ	シュート	手押炭車	計245HP	73m-310m		手撰炭	
	大宝炭坑	〃	〃	チリトン又ハシュート	〃	計365HP	33m-143m		手撰炭	
	徳山炭坑	〃	〃	シュート	〃	計300HP	100m前後		手撰炭	
	三神炭坑	不規則ナル残柱式及軟長壁法	〃	小炭車並ニシュト	D.7延炭車手押並エンドレス	計365HP	92m-230m		手撰炭	
	歯相炭坑	残柱式	〃	チゲ豆炭車	手押炭車	計100 HP	垂直126m		手撰炭	
	徳川炭坑	十シ	〃	〃	〃	〃	〃		〃	
	新倉炭坑	昇掘長壁法	〃	シュート	〃	計500HP	44m-48m		手撰炭	
朝陽鉱業	朝陽炭坑	柱房式採炭法	〃	小炭車又ハ捲コール	主ニ人車	計175HP	不明			